

## ソシオン・コミュニケーションの多重媒介モデル

木村 洋二 ・ 渡邊 太

Mediation of Trust and Distrust in the Communication  
of "Socion" Networks

Yohji G. KIMURA, Futoshi WATANABE

## Abstract

"Socion" (social+neuron) is our term to designate a knot of social networks. Socions learn the degree of "trust" and "distrust" ("semio-weights") with each other through communication. The network of socions consists of three layers. The first layer is of objective actions, the second is of subjective representations (images), and the third is of meta-representations (symbols). A "Dyon" is a semio-engine which generates love and hate (desire in general) in a dyadic relation. A "Trion" is a triadic semio-converter in which trust and distrust are interchanged. The trions with two negative relations (PPP, PNN, NNP, NPN) are operationally stable ("Heider-balance"). A stable trion projects positive or negative "expectations" (trustworthiness or doubtfulness) through its balancing operation. The emergence of "thinking" (as a movement of "?") is discussed in terms of mediated communication. Selectivity of thinking (whether to trust or to distrust) is determined unconsciously by the network structure in terms of trion stability. The general model of socion communication is presented in the first chapter, and some applications regarding ideology, persecution, and mind-control are discussed to explain the dynamics of socion networks.

Key words: socion, network, trion, media, communication, reality, laughter, balance, ideology, mind-control

## 抄 録

ソシオン (socion=socio+neuron) は、個人や集団をさすわれわれの造語である。ソシオンは、コミュニケーションをつうじて互いに信不信の重みづけを学習して荷重ネットワークを形成する。信Pあるいは不信Nによって結ばれたソシオンの3項回路をトリオン (trion) とよぶ。N結合を2個もつトリオン (PNN, NNP, PNP) は、変換動作が安定する。N結合を1個しかもたないトリオン (NNP, PPN, NNN) は不安定となる。PPPは安定、NNNは不安定である。安定トリオンは予期を投射する。そのリアリティは信頼荷重の関数となる。不安定トリオンは、信不信の荷重布置の安定化つまり安定トリオンへの移行をめざして、ネットワーク近傍における荷重変換を誘導する。このトリオンの誘導によって、ソシオンのネットワークに一種の「思考」が発生する。正負の荷重変換をとまなうこの思考は、ネットワーク近傍の荷重構造によってその自由度を大きく規定される。本稿は、ネットワークに書き込まれてはいるが、意識化されにくいトリオン回路をソシオグラフを用いて記述し、無意識のうちに生かされる思考と感情の構造を検討する。ネットワーク上を走る意識は、地図をもたずにけもの道を走る人のように、トリオンの閉回路に幽閉されるリスクがある。第I部で木村がソシオンのネットワークにおける荷重の媒介構造についていくつかの基本モデルを提示し、第II部では、渡邊がより具体的な文脈での社会分析と学説の検討をつうじてモデルの理論的な射程を探る。

キーワード：ネットワーク、ソシオン、トリオン、多重媒介、荷重、リアリティ、笑い、バランス理論、イデオロギー、マインドコントロール

## I. 多重媒介の基本モデル

### I-1. 荷重と情報

人間は、コミュニケーション・チャンネルから獲得した情報を活用してそれなりの適応活動を営む。成功を導いた情報をもたらしたチャンネルは「信頼」（正の荷重備給）が強化され、失敗をもたらした情報源の「信頼」は減少する。また、「騙された」と感じた場合は、「不信」というかたちで負の荷重が強化されるだろう。

ソシオン（人間および集団）のコミュニケーションにおいて、「情報」は、「メッセージ」と「荷重」という2つの要素によって構成される。荷重は、たとえば声の大きさ、緊張度のようにメッセージ内容と一体となって伝達されるばあいもあれば、声の主や差出人の名のように、メッセージとは独立したチャンネル荷重としてもたらされることもある。

荷重が、メッセージ内容とともに重要な情報要素となるのは、人間は嘘をつくことがあり、また間違ふ可能性をもつ存在だからである。荷重はメッセージの割引率（あるいは増幅率）である。言葉Sで伝えられた情報Iのリアリティは、メッセージ内容Rと荷重Wの関数となる。

$$I=S \cdot R \times w \quad (1)$$

（I：情報 S・R：メッセージ w：荷重）

コミュニケーションによってある記号Sが運ばれたとき、荷重Wの備給によって表象Rがリアリティを獲得する様子を模式的にあらわしたのが図I-1.1である。

左の三角形Sは、他者から伝えられた言葉（Symbol）を、右の4つの小円Rは、到来した言葉Sによって喚起された表象（Representation）を表わす。下方の二重円Wは荷重（Semio-Weight）つまり正負の予期ポテンシャルの出力系を示す。中心の矩形は、表象にたいして必要な荷重出力＝予期ポテンシャルを供給する「備給」（cathexis<sup>1)</sup>）回路を表現している。

シンボル記号Sによって喚起された表象Rは、そのシンボル（＝とりあえず言葉）に付随する荷重成分に応じて、予期ポテンシャルを備給され、それなりのリアリティをもって

1) cathexis はS.フロイトが、心的エネルギー（リビドー）を表象に供給する心的（神経的）メカニズムをさして使用した用語 Besetzung の英訳である。仏訳では、投資の意味もある investissement となっている。日本語訳では「備給」という用語があてられることが多い。予期ポテンシャル自体は安永浩の「ファントム・エネルギー」（安永1977）の概念からヒントを得ている。

ソシオンの意識野 (sub-space) に立ち現れることになる。図 I - 1. 1 の小円 R の大小は、同一の言語表象でも、荷重備給の差によってリアリティ (= 予期の強さ) に差異が生まれることを示している。

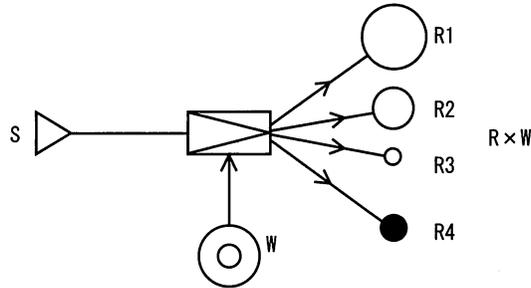


図 I - 1. 1 備給系

荷重 W は、脳神経系における何らかの回路メカニズムによって、表象 R に供給 (備給) される賦活出力で、大小の強度と正負の分極をもつポテンシャル量である。主体が内部に構成する表象 R のリアリティは、備給された荷重量の関数となる。同じ表象であっても、備給量が少なければ、十分な予期は起ち上がらない。上の円 R<sub>1</sub> がもっとも予期のポテンシャル量が大きく (リアリティが強く)、順にリアリティが減少する<sup>2)</sup>。

一般に、聞き手は「何が」話されたかに注意を集中するので、それが「どのように」話されているかは意識されにくい。つまり、意識がメッセージの内容を捉えようと指向するほど、荷重成分は無意識のうちに伝達受容される。荷重は、デキゴトが望ましいか、望ましくないかによって、正負に分極する。一番下側の黒塗りの小円 R<sub>4</sub> は、負の備給をうけた表象 R を表しており、嫌悪や警戒を誘うマイナスのリアリティが生まれると考えることができる。

たとえば図 I - 1. 1 の右の小円 R をリングとする。「ほら、リング!」というだれかの声 S でリングの表象 R が起動されたとしよう。(リングに対する主体の好みや荷重記憶、必要度といった条件は一定とする。)「ほら、リング!」という声が弾んだ明るい声であれば、受け手のリング表象 R<sub>1</sub> は、赤いおいしそうなりんごの予期 (リアリティ) で満たさ

2) 表象 R へ備給された荷重エネルギー W が急激に撤収 (脱備給 decathexis) されたばあい、行き場を失った予期ポテンシャルが余剰化して「笑い」として表出されたと考えることができる (木村 2002, 1983)。表象 R は荷重備給を失うので、リアリティを脱失して「からっぽ」の表象となる。H. スペンサーは、150年ほど前にこの大から小へのズレ “descending incongruity” が「笑い laughter」を生むと考えた。反対に小から大への突然のズレ “ascending incongruity” は、彼によれば「驚き wonder」を生む。スペンサーのこのモデルは、いささかエネルギーを実体化し過ぎているとはいえ、今日の脳科学において再検討するに値する先駆的洞察を含んでいる。

れるだろう。逆に、だるい沈んだ声ならば「またリンゴか」といった程度の小さい予期  $R_3$  が生まれるだけかもしれない。このように、音調やリズムといった形でメッセージに付随する荷重成分をメッセージ荷重とよぶ。

さらに、同じような音調の「リンゴ!」でも、その言葉  $S$  を発したのはだれか、によっても表象—リンゴ  $R$  のリアリティが変わる。「リンゴ!」という言葉の主が恋人ならば、「リンゴ  $R$ 」はかなりリアルに現前するだろう。それがもし魔法使いの声だ、と判れば、恐怖感をともなう負のリアリティが生まれるだろう。黒い円  $R_4$  はこの毒リンゴのもつ負の荷重成分を示している。このように、チャンネル（発言者）に対して置かれた信不信の大きさをチャンネル荷重とよぶ。

表象への備給は、一般に個体の内部では完結しない。表象のリアリティは、他者の同意によって「裏打ち」される必要があり、それを可能にするのが会話である。もし単独で表象を十分にリアルに備給できれば、人間は妄想と着想を、ひいては夢と現実を区別できなくなるはずである。

図 I-1.2 a はソシオン A と B の「対話」を表している。人間は、相手の話に耳を傾けながら、「うなづく」ことで、荷重備給を交換し、「リアリティ」を支え合っている。人間を狂気から救っているのは会話である。うなづくことは、妄想かもしれない相手の考えや思いを、理解可能なものとして備給することである。さらには、同意できるものとして支持を与えること、表象  $R$  にリアリティ  $W$  を裏打ちすることである<sup>3)</sup>。

ふたたびリンゴの例にもどらう。たとえば、ソシオン A は B に記号  $S^a$ （「ほら、リンゴ!」）を送り出す。 $S^a$  を ( $S^b$  として) 受け取ったソシオン B は、リンゴの表象  $R^b$  を持ち上げてこれに備給する。このとき「ほんと!」とうなづいた B を見た A の内部（サブスペース）で、リンゴ表象のリアリティが確定する。「まだ青いね」と返した B に A がほほえむと、今度は B の内部で逆方向の備給が発生して、ふたりの間で青いリンゴの表象  $R$  のリアリティが「相互主観的」に確定する。図に荷重系  $W$  が下方に一個しか描かれていないのは、会話においてしばしば荷重系のシンクロ・同一化が発生することを暗示する。

なお、図 I-1.2 b は、A と B が頭上の青いリンゴ  $R$  を指さして、目を見合わせている様子を図式にしたものである。この図から、ソチラとコチラとして相対するふたりの荷重系  $W^a$  と  $W^b$  が、リンゴ表象  $R$  に対する「指し示し<sup>4)</sup>」を介して結ばれている様子を想像していただきたい。この種のデキゴトの記憶あるいは予期の共有が、たとえば w-a-t-e-r と

3) P. バーガー & ルックマン 1966=1977 (*The Social Construction of Reality* = 「リアリティの社会的構成」)。邦訳書名は「日常世界の構成」を参照。

いう恣意的な記号Sの伝達でできるようになったとき、シンボル言語による対備給が可能になり、表象世界が共同主観的な地平へ決定的なかたちで拓かれることになる。

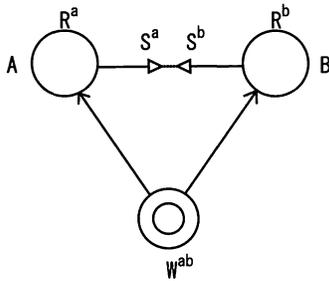


図 I-1.2a 対備給

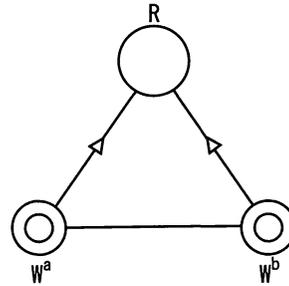


図 I-1.2b 指し示し

## I-2. 見ると聞く

対象Xについて語り手(媒介者)Mが私Sに語る、という一方の荷重コミュニケーションを考えよう。図I-2.1はそれをソシオ・グラフで表わしたものである。左の大円から順にオブジェクト・レベルの対象/デキゴトX、中心の大きな円がコミュニケーション・チャンネルとなる媒介ソシオンM (mediating socion)、右の円Sが情報の受け手となるソシオンSを表わす。

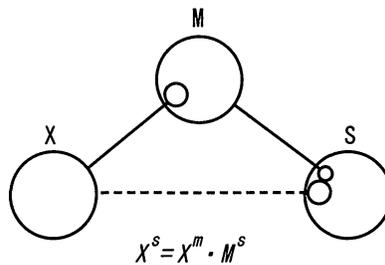


図 I-2.1 単媒介(耳の門)

ソシオンMの内部に描かれた小円は、対象/デキゴトXについてMが構成した荷重像 $X^m$ を、ソシオンSの内部にある小円は、MについてSが構成した荷重像 $M^s$ を表わす。

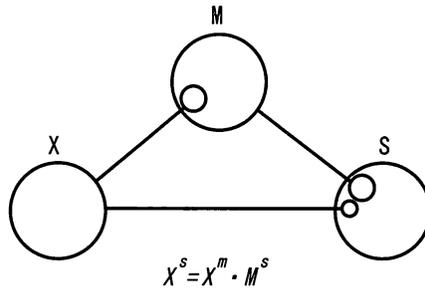
4) 視線や指差しによる「指し示し」Sによって、特定の対象(知覚表象)Rに注意を誘導する/できる能力は、言語の発生と密接に関連している、と考えられる。詳細は木村1999。

媒介者MからXの荷重情報 $X^m$ がもたらされたでしょう。ソシオンS(人間やその組織)は、Mに配備されたチャンネル荷重 $M^s$  ( $W_{sm}$ あるいは $W_{s \rightarrow m}$ とも表記する)で表象Xを備給することで、それなりに現実的なものとして内部に構成する。Sにとって、 $X^m$ はメッセージ荷重、 $M^s$ はチャンネル荷重に相当する。受け手Sが構成するXの荷重像 $X^s$ は、Mが見たXの荷重像 $X^m$ と、媒介者MにSが置いた信頼荷重 $M^s$ の積となる(式2)。

$$X^s = X^m * M^s \quad (2)$$

媒介者Mに対する信頼荷重 $M^s$ はメッセージ荷重 $X^m$ の増幅係数となる。この信頼荷重 $M^s$ が形成されるには時間がかかるが、失われるのに時間が要らないことは、オオカミ少年の例を出すまでもない。

図I-2.2は、図I-2.1のヴァリエーションで、水平にひかれた実線は、SがXを自分の目で直接Xを見て荷重できることを表わしている。これを「目」のチャンネルとすれば、Mを媒介する回路は「耳」のチャンネルといえる。耳のチャンネルでは、Sは信頼をよせるMの話に耳を傾ける、つまり「聞く」。このとき、信頼荷重 $M^s$ による増幅効果が効いてくる。つまり、他者Mへの信頼荷重 $M^s$ は、Xの像 $X^s$ が形成されるまさに耳の門(=「聞<sup>5)</sup>」!)となるのである。この増幅ゲートの荷重が小さければ、いくらMが大声でXをほめてもSにおけるXのリアリティ(予期ポテンシャル)は高まらない。逆にこのゲート荷重が大きければ、媒介者Mの発言は増幅して受け止められる。



図I-2.2 単媒介(見ると聞く)

一般に「百聞は一見にしかず」で、耳より目の方が真実に近いと考えられる<sup>6)</sup>が、時

5) 注意深く尊敬をもって耳を傾けることは話者の意図をこえた意味をくみとることを可能にする。親鸞やレヴィナスにおける「聞(もん)」の重視は、このゲート荷重を開くことで、他者性へのセンシティブリティを高める働きがありそうである(木村・小林1999)。

に、目よりも耳の生み出すリアリティの方が強く頑なに信じられる場合もある（脚注15を参照）。一般に自分の目で確かめることのできない社会的表象－存在のリアリティは、ひとえにそれを報じるメディアに対する受け手の信頼に依存している。表1にそのような媒介によって誕生する存在（表象×荷重）の簡単なリストをあげた。

表1 増幅荷重体

X：対象	M：媒介者	S：主体
サンタクロース	父母	子ども
オオカミ	少年	村人
最後の審判	預言者	信者
病気	医者	患者
テロリスト	大統領	国民
ニュース	マス・メディア	視聴者
思想	本	読者
商品	CM	消費者

### I-3. 複媒介

ソシオンはふつう複数のチャンネルに連結されている。図I-3.1は、 $M_1$ 、 $M_2$ ふたつのチャンネルに連結されたソシオンSが、Xについての異なった荷重情報を受けとる場合を表している。受け手Sのサブスペースでは、 $M_1$ を介して伝えられたXの荷重像 $X^{m_1}M_1^s$ と、 $M_2$ を介してもたらされた荷重像 $X^{m_2}M_2^s$ のふたつの荷重像が生まれることになる。ひとつの対象Xについて2つの荷重像が競合するとき、「思考」が発生する。ちなみに、荷重が1か0で固定されているときには、思考が発生しない。信者と不信心者がどちらも神について思考しないのはそのためである。

図では、 $M_1$ はXについて肯定的に語り、 $M_2$ は否定的に語っている。もしソシオンSが $M_1$ 、 $M_2$ どちらも同程度に信頼しているとすると、SのサブスペースでXの荷重値が正と負のあいだで振動するだろう。ここでもし、Sの $M_1$ に対する荷重 $M_1^s$ が $M_2$ に対する荷重 $M_2^s$ よりほんのすこしプラスに振れたとしよう。その増幅効果によって $X^s$ の荷重値つまりSのXに対する印象（破線で表示）はプラスに転じることになる。Xについてネガティブに語る媒介者 $M_2$ にたいするSの荷重は、いずれマイナスに転じる可能性が高い

6) 話に聞いていた憧れのXを自分の目で見てみると、ほとんどの場合、荷重の落差が発生する。この落差は、落胆や笑い、あるいは驚きといった人間特有の経験を生み出す。ウソや冗談、誇張やうわさ話などによるコミュニケーションのおもしろさは、この耳と目のチャンネルによって生まれるリアリティの多重性による、といえよう。

(図 I-3.2)。そして、 $XM_2S$  の 3 項回路 (トリオン) は  $N$  2 個で安定状態にはいる<sup>7)</sup>。

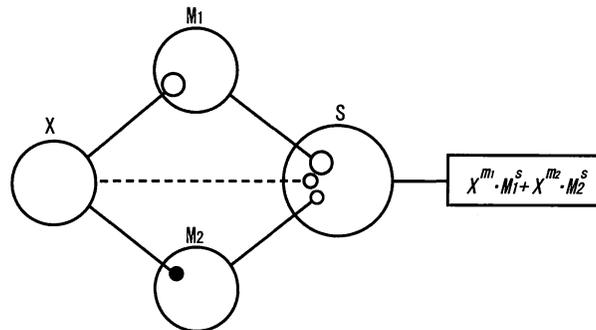


図 I-3.1 複媒介

図 I-3.2 は、メディア  $M_1$ 、 $M_2$  のあいだに荷重関係を導入した回路図である。X にたいする意見が媒介者  $M_1$  と  $M_2$  で対立しているとする。ここで、突然  $M_1$  が「 $M_2$  は嘘つきだ」と発言した (波線の矢印線) としよう。左の  $M_1 \cdot X \cdot M_2$  の 3 項回路 (トリオン) に注目してほしい。嘘つきである  $M_2$  が X について構成した負の荷重像  $X^{M_2}$  は「虚偽」だ、とすると、X の荷重自体はプラスだ、ということになる。N 変換 (否定) を 2 個もつトリオンのループでは、 $N \times N \rightarrow P$  で負の負は正となるからである。このトリオン変換によって、S の X への荷重は、ポジティブ (P) でフィックスする。その結果として、プラスの存在である X を悪く言う  $M_2$  に対する S の信用は失われ、ついに不信へと反転することになる。

図 I-3.1 では、 $M_2^s$  は小さいながらもまだ白いつまりポジティブとなっているが、S が一貫性を大事にするならば、 $M_2^s$  は遠からず負の黒丸に変わるだろう (図 I-3.2)。 $M_1$  にたいする  $M_2$  の当初の信頼荷重  $M_1^{M_2}$  も、最後にはネガティブ (黒丸) に変わると予測できる。こうして、 $M_1$  の人身攻撃を引き金に起動したトリオンの力学によって、 $M_2$  は S の信用を失い、ネットワークのなかで孤立を深めることになる<sup>8)</sup>。

上に例示的に見たような一連の荷重変換動作がネットワーク上で発生しているとき、

7) 3 項連結の荷重変換回路をトリオンとよぶ。2 辺に否定結合  $N$  をもつトリオンは安定である。3 辺ともプラスの結合も安定する。否定結合  $N$  が一辺しかない回路は安定しない。変換が一巡するたびに荷重値が正負反転して、対象への信不信、愛憎の備給が反転するからである。トリオン安定の発想は、F. ハイダー 1958=1978 のバランス理論に触発されたもので、荷重ネットワーク理論としてのソシオン理論を特徴づける重要なポイントである。木村 2001 を参照。

ネットワークが「思考」している、と表現することは修辭的に過ぎるかもしれない。しかしわれわれが経験する対人的な「感情」と「思考」は、サブスペースにおけるネットワークの荷重変換動作の意識への反映である、と主張することは可能である。

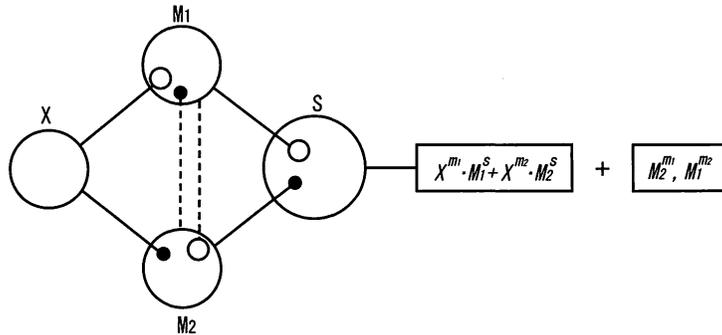


図 I-3.2 複媒介 (メタ荷重)

#### I-4. メタ荷重

媒介チャンネルが多重化すると、荷重情報の競合が発生しやすくなり、「思考」がいつも促進される。たとえば、ある医療チャンネルM<sub>1</sub>からの情報によればXは「特効薬」であり、他のチャンネルM<sub>3</sub>からの情報によればXは副作用が強い「毒」である。これに加えて、M<sub>1</sub>は名医であり、M<sub>3</sub>はその弟子筋である、といったメタ情報が行き交うと、3項連結回路 (トリオン) が不安定化して、それなりの「思考」が賦活される。さらに、名医M<sub>1</sub>を紹介したM<sub>2</sub>がニセ医者だったりすると、ネットワーク上の荷重布置総体がゆらぎはじめて荷重が流動化し、疑心暗鬼の混乱が生まれる。

図 I-4 で右側に記載した長方形の枠は、ソシオンのサブスペースを示しており、1個目の枠の内部は、ソシオンS<sub>1</sub>、S<sub>2</sub>、S<sub>3</sub>が、それぞれ3個の媒介者メディオンM<sub>1</sub>、M<sub>2</sub>、M<sub>3</sub>から取り込んで構成したXの荷重像を表わしている。それぞれが3個のチャンネルから情報を取得すると仮定すると、3×3でネットワーク上にXの荷重像が9個構成されることになる。XについてソシオンS<sub>j</sub> (受信者) が構成する像の荷重X<sup>S<sub>j</sub></sup> (イメージのリアリ

8) 一般に、媒介者をターゲットにしたネガティブな荷重情報の発信は、トリオンをロックして、荷重コミュニケーションのループを閉じてしまいやすい。理性と自由討論を奉じる民主主義が、メディア間の誹謗合戦を禁じるのは、他者への不信を絶対化することで思考が閉じたループに陥ることを回避し、真実とはなにかをめぐる合意への可能性 (検証可能性) を未来に開いておくためである。開かれた討論の重要性については、K. ポッパー 1945 = 1980を参照。

ティ)は、Xへの媒介者 $M_i$ の荷重 $X^{M_i}$ と、媒介者 $M_i$ への受信者 $S_j$ の荷重 $M_i^{S_j}$ の積となる。 $M_1$ 、 $M_2$ 、 $M_3$ のXに対する荷重像 $X^{M_1}$ 、 $X^{M_2}$ 、 $X^{M_3}$ はそれぞれ異なるのがふつうであり、 $M_1$ 、 $M_2$ 、 $M_3$ に対する $S_1$ 、 $S_2$ 、 $S_3$ の信頼荷重 $M_i^{S_j}$ もそれぞれ差異があるのが自然である。このことから、ソシオン $S_1$ 、 $S_2$ 、 $S_3$ がサブスペースに構成するXの荷重像は、それぞれ違ったものになる可能性が高い。多重媒介によって生まれるこの $X^{S_j}$ の原理的多様性が人間の物の見方の多様性を説明するように思われる。

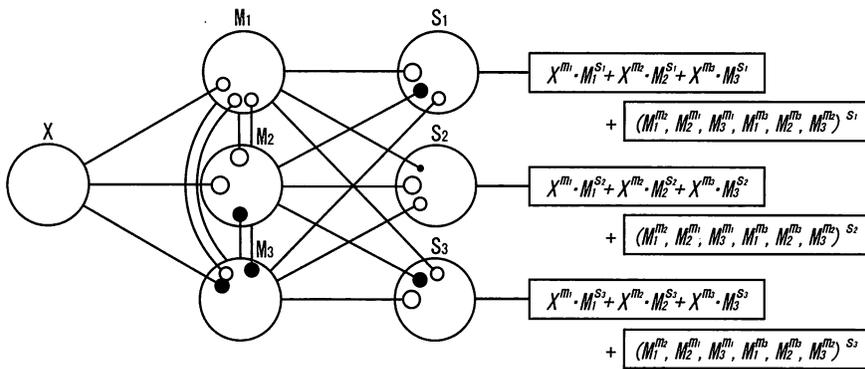


図 I-4 多重媒介 (メタ荷重)

なお、右端に位置する2個目の長方形の内部は、媒介者となるソシオン $M_1$ 、 $M_2$ 、 $M_3$ が互いに他の媒介者に置いた荷重に対する当該ソシオン $S_1$ 、 $S_2$ 、 $S_3$ の「理解」を表わしている。トリオン変換を含む多重媒介においては重要な「メタ情報」となるが、モデル自体としては図 I-6 に包含されるのでここでは無視していただいてさしつかえない。

さて、多重チャンネルから生成される複数の荷重像はつねにサブ・スペースで並列的に共存している、というわけではない。むしろ、ある主題Xについての荷重は、「会話」をつうじて一定の荷重値へと収斂するのがふつうである。Xについての「良い話」をあちこちから聞けば、ますます良い印象が固まるだろうし、「悪い噂」ばかりが耳に入ると、印象が悪くなってしまおう (とりあえず加算で示した)。

これに対し、Xについての荷重が正Pと負Nに分極した場合は、加算的な合成は起こらない。いずれどちらか一方が選ばれるまで、備給保留される(「エポケー」=「判断停止」)か、さもなければ正と負のあいだで荷重値が振動する(「アンビバレンス」)、と考えられる。アンビバレンスそれ自体は(時に「笑い」を生む)ノーマルな現象であるが、重要な他者に対する荷重備給が振動すると、表象世界全体が存在論的に不安定化<sup>9)</sup>すると

いった事態も起こるかもしれない。いずれにせよ、多重媒介は、サブスペースに構成される荷重表象に多様性をもたらし、人間の内的世界 (サブ・ワールド) を固有化する、と考えられる。

I-5. 多重媒介

図 I-5 は同じく多重媒介の図であるが、対象となるデキゴト X が  $X_1, X_2, X_3$  と複数化している。このことは、媒介者  $M_1, M_2, M_3$  がそれぞれ複数のデキゴト  $X_1, X_2, X_3$  に選択的に荷重することを含意している (重みづけられたデキゴト空間としての「世界」の構成)。

世界のデキゴトは実に多様であり、視点や立場によってその切り取り方や重みづけのあり方は異りうる。しかし、受け手であるソシオン  $S_k$  の世界には、 $M_j$  からのコミュニケーションに依存するが、 $M_j$  が選択的に切り取って荷重したデキゴト  $X_i$  しか入力されない。 $S_k$  のサブ・スペースにおける  $X_i$  のリアリティ  $X_i^{S_k}$  の構成は、 $M_j$  にたいする  $S_k$  の信頼  $M_j^{S_k}$  によって規定されるが、同時に  $M_j$  による  $X_i$  の切り取り方  $X_i^{M_j}$  にも依存する。M をわれわれが日常に接触するメディアだとすると、われわれがふつうに「事実」と思いこんでいるデキゴトは、メディアがデキゴトを見る目 (編集者の荷重バイアス) と、メディアを見る私たちの目 (視聴者の荷重バイアス=チャンネル荷重) の、極めて主観的な掛け算によってリアリティを獲得する、といえる。

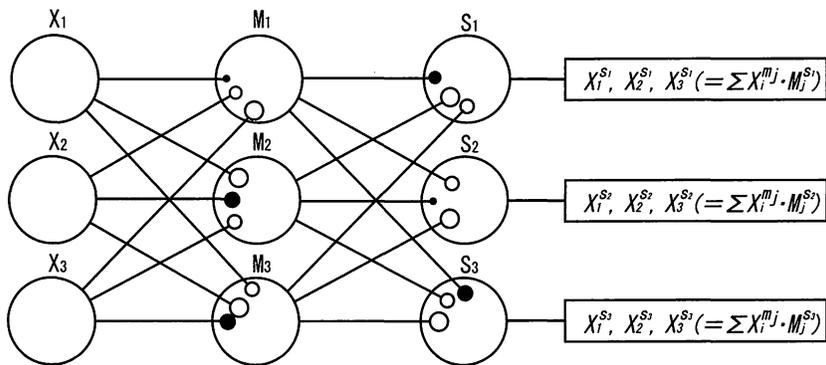


図 I-5 サブ・ワールド

9) 存在論的不安定 ontological insecurity は R. D. レインが用いた言葉で、対人的・世界観的な安全保障感が失われて、リアリティが不安定化することを指している。R. D. レイン 1961=1975などを参照。

### I-6. 高次媒介

さらに媒介の次数を高くしてみよう。図I-6はデキゴト $X_i$ に荷重する媒介者 $1M_j$ にさらに荷重する2次の媒介者としてソシオン $2M_k$ を付け加えたものである。Xをデキゴトとすると、 $1M$ は取材記者、 $2M$ は編集者とみることができる。いうまでもなく、Sは読者や視聴者を意味する。 $1M$ の内部の小円 $X^{1m}$ は1次の媒介者がデキゴトXにおいた荷重 $W: 1M \rightarrow X$ を表している。 $2M$ の内部の小円 $M^{2m}$ は2次の媒介者が1次の媒介者 $1M$ においた荷重 $W: M_2 \rightarrow M_1$ を表している。 $X^{1m}$ は記者あるいは情報提供者のデキゴトに対する選択的荷重(目)を、 $1M^{2m}$ は記者もしくはニュースソースに対する編集者の信頼(耳)を表わしている、といってもいい<sup>10)</sup>。

$1M$ の取材、 $2M$ の編集、そしてSの聞き取りあるいは読み取りの各レベルには、それぞれ一定の選択性を生み出す自由度がある。しかし同時に、近傍のネットワークのトリオン動作が生み出す荷重の誘導力によって、この自由度は構造的な制約をうける。その誘導力が生まれるコンテキストにトリオン分析を加えることは、ネットワークの関係一回路的制約条件を可視化し、社会的無意識を意識化する上で重要な作業となるだろう。

荷重ネットワークの結合パターンに、「分裂結合<sup>11)</sup>」と名づけたいくつかの(しばしば不毛で不幸な)安定状態が存在するのを見出したのは、この間のソシオン研究のひとつの成果であった。信頼と不信を自己組織化するソシオンのコミュニケーションにおいても、ネットワークは信頼と不信、否定と盲信で閉じたいくつかのサブグループに分かれた(=割れた)まま冷えた安定状態に陥ることがある、と想定できる。

こうした安定状態へ落ちこむネットワークのダイナミックスを解析し、軌道と分岐点を見極めることが今後のコミュニケーション研究の重要なポイントとなる。分岐点では、おそらく、何が話されたかよりも誰が話したかが第1義的に重要となる。だれが、いつ、だれに、どのように声をかけるか、そのコミュニケーションの順序と経路がネットワークの命運を決める重要な戦略要因となるはずである<sup>12)</sup>。初期条件の微妙な差異が、おおきく結

10) 図のXの列はラスウェルの図式におけるWhatに、2列目の $1M$ は(ほぼ)Howに、第3列の $2M$ がWhoに対応する、とみることができる。荷重バイアスを「レンズ」と呼ぶことにすると、 $X_i^{1m}$ は取材レンズ、 $1M_j^{2mk}$ は編集レンズ、 $2M^{Sl}$ は読者レンズ、といえる。なお、新聞各紙の「編集レンズ」に焦点をあてた初歩的な比較研究は木村・板村・池信2004を参照。

11) 木村・松尾・渡邊2001。本稿106~109頁も参照。

12) イーゴの密かなささやきが人々の運命を動かすのも、そうした分岐点においてである。シェークスピアや近松門左衛門の作品は、人間の運命の分岐が、この種のネットワーク・ダイナミックスによって発生することを鋭く洞察しているように思われる。

果を分けるこの種のダイナミックスは、いずれコンピューター・シミュレーションによって検討を加えることになる。

最後に、「不信」の機能についてふれておきたい。不信は単媒介ではほとんど意味をなさない。疑わしい人物の話は何のリアリティも生まないからである。しかし、不信という負の荷重は、多重媒介では重要な意味をもってくる。不信や嫌悪のようなネガティブな荷重体を回路に取り込み、これを否定することで、ポジティブな荷重を発生・保存することが可能になる (NNP トリオン変換) からである。渡邊も指摘するように<sup>13)</sup>、ソシオンの多重媒介ネットワークでは、ネガティブな荷重が核心的な機能を果たしうる。この問題は、ほとんど善人によって構成される人間の社会に、なぜ差別や排除が発生するのか、なくなるのかを説明する合理的な視点を提供するだろう。神がなぜ悪魔を創造したのか、その秘密を解く鍵も、おそらくこのネットワーク・ダイナミックスのなかに隠されている。

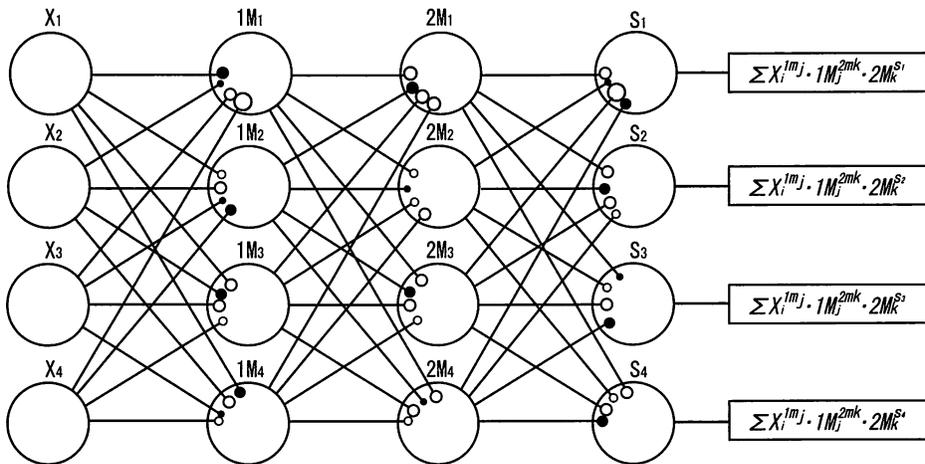


図 I - 6 高次媒介

多重媒介コミュニケーションの基本的な回路図。1M = 2Mとすると1次媒介モデル (図5) に、 $X_1 = X_2 = X_3 = X_4$ とすると図4のモデルに相同となる。また、 $X_1 = 1M_1 = 2M_1 = S_1$ でAと置き、 $X_2 \dots$ をB、 $X_3 \dots$ をC、 $X_4 \dots$ をDと置くと、このモデルからA (ワタシ)、B (アナタ)、C (カレ)、D (ダレカ) の間の「鏡像コミュニケーション」の図式「ソシオトロン」(木村・池信2002: 88、92頁)を得る。

13) 渡邊太2002 a を参照。

## II. 多重媒介モデルの理論的射程

### II-1. 情報と現実の社会理論に向けて

現実の認識は、社会的に構成される (Berger & Luckmann 1966=1977)。人間は、現実を現実として構成する。客観的な現実是谁にとっても疑いようのない真実性を備えている、という想定は、社会的現実が自らの機能のために必要とする幻想のひとつである<sup>14)</sup>。しかし、時折、現実に関する素朴な想定が崩れる出来事に我々は直面する。

目の前に腐乱した死体がある。異臭が漂い、遺体には蛆虫が湧き始めている。ふつうに考えると、それが生きた人間ではなく死体であることは疑いようのない現実である。しかし、1999年にライフスペースが起こしたミイラ事件では、グルと弟子たちが腐乱した死体を「まだ生きている」と信じていたのだった。グルと弟子たちは、「まだ生きている」と信じて、加療として気を送る術を続けたという<sup>15)</sup>。

ルポライターの米本和広は、ライフスペースの信者たちが腐乱した死体を生きていると信じていたことに衝撃を受けて、次のように述べている。

身体は微動だにせず、声も発せず、脈拍もない。それは視角と聴覚と触覚でわかる。身体が冷たくなっていく。それは触覚でわかる。死後数日して強烈な腐乱臭が漂ってくる。それは臭覚でわかる。死体が黒ずんでいくのは目で見てとれる。「五感」から伝わる情報のすべてが脳に「死」を認知させるはずである。しかし、高橋弘二と弟子たちの脳は自分たちの五感を通して生きていると認知する。(米本 2000:85)

認知的には、死体として認識されるべきはずなのに、なぜグルと弟子たちは生きていると認識することができたのか。彼らは、目の前の現実を見ているのに見ていないのだろうか<sup>16)</sup>。

14) 現実が確実なものであるという幻想は、現実的に機能する。その意味で、幻想は社会的現実の客観的条件の一部となる (Zizek 1989=2000)。

15) 高橋弘二をグルとする自己啓発セミナー・グループの「ライフスペース」が引き起こしたミイラ事件 (1999年7月) は、世間に大きな衝撃を与えた。米本和広のルポルターージュによると、遺体からウジ虫が這い出ると、グルは「行者イエダニだ。生還したぞ」といい、腐乱汁が肛門から流れると「排便している」といったという (米本 2000:81)。

16) 現実の認識について、次のようなイエスの言葉は示唆的である。「だから、彼らにはたとえを用いて話すのだ。イザヤの預言は、彼らによって実現した。『あなたたちは聞くには聞くが、決して理解せず、見るには見るが、決して認めない。この民の心は鈍り、耳は遠くなり、目は閉じてしまった。こうして彼らは目で見ることなく、耳で聞くことなく、心で理解せず、悔い改めない。わたしは彼らをいやさない』 (マタイ 13:13-15)。たいていの場合、人は、聞いても聞いていないし、見ても見ていないのかも知れない。

おそらく、ここに人間的現実を理解するための鍵が潜んでいる。「五感」による認知として確実な現実のように思えることも、じつは情報の信憑性を通じて社会的に構成されるのである。

他者の信仰は、しばしば陳腐で馬鹿らしく見えてしまう。遺体を生きていると信じたライフスペースの信者たちを、我々は奇妙な信仰のあわれな末路と感じる。しかし、我々の社会的現実もライフスペースの信者が遺体を生きた人間と認識したのと基本的には同じ機制に依るのだとしたら、変な人たちの珍奇な信仰として理解するだけで済ませるわけにもいかなくなる。

現実、コミュニケーションを通じて構築される。その際に、現実として構成可能な事象領域を可能な限り拡大して考える必要がある。死体を生きていると認識することは、現実的にはあり得ないように思える。しかし、少なくとも信者たちにとってはそれが現実だったのである。そのような現実がいかにして可能か、ということ我问う必要がある。

多重媒介モデルは、情報の信憑性についての判断がどのように構成されるかを説明する。事物・事象に対する正負の荷重備給は、環境内の出来事に対する予期的対応を含む形で社会的現実を構成する。

認識は、未来への予期をともなつて構成される。荷重の備給によって、主体にとって望ましい出来事が起こるとする正の予期と、望ましくないことが起こるとする負の予期が起動される。人は進行する時間のなかで、次に何が起こるか、という予期をたえず選択的に起動しながら環境を認識する。

認知科学的研究は、予期が正負の分極性をもつことを明らかにしている。環境から入力される情報には、生体にとって有益・快となる情報（報酬性）と、有害・不快となる情報（嫌悪性）がある。報酬性に対応する正の予期と、嫌悪性に対応する負の予期が、認知の基盤になる（Carter 1998=1999; Damasio 1994=2000; 小野・西条 2001）。<sup>17)</sup>

正負の予期は、記憶と関連付けられることで、嬉しさや怖れといったより複雑に分化した感情として意識化される。意識化された段階で、予期は正負の情緒的価値となる。

意識においては、情報としての強度をもつのは情緒的価値を帯びた情報である。何かが起きる、という予期を強く喚起する情報は、主体の次の行為にとって有意に関連性が高い（relevant）はずである。強度をもたない情報は、主体が判断を要請された状況において

17) ソマティック・マーカー仮説を提示する神経科学者のA. ダマシオは、即座の判断における身体的反応の重要性を指摘している。ソマティック・マーカーとは、推論と判断を要する状況において特定の行動選択がもたらす可能性のある肯定的ないし否定的な結果に注意を向けさせ、「この先にある報酬/危険に注意せよ」というメッセージを発する自動化された危険信号を指す概念である（Damasio 1994=2000）。

関連性のない (irrelevant) 情報として、注意の枠外に置かれる。

荷重が備給されることによって、サブスペース (主観的リアリティの場) に構成された表象は現実としての質感を獲得する。表象の現実感、情報の信憑性と同義である。情報の信憑性は、情報のリアリティを意味する。すなわち、人間の情報処理過程においては、情報の意味内容は情報の信憑性とセットになっているのである<sup>18)</sup>。

現実感を備えた事物・事象には、微弱なものから強烈なものまで強度の幅をもつ荷重が付着している。付着した荷重は、事物・事象の感情的色彩として意識化される。予期が現実感を造り出す。現実の認識が次に起こる出来事の予期を組み込んで構成されているということは、つねに不確定な運動的コンテクストに身を置いている個体にとってきわめて合理的なシステムと考えられる<sup>19)</sup>。

荷重を帯びることで現実性を獲得した事物・事象は、主体にとって揺るぎない現実と感じられる。それが現実の信憑性であり、疑いようのない事実 (fact) と感じられる<sup>20)</sup>。

我々は、目に見えることや手で触れることができることをリアルと感じる。直接的に自分の目で見ること、自分の手で触れることは、確かめるという営みであるからこそ、現実性の規準として信用できる。百聞は一見に如かず、というように、確かめられることが現実かどうかを判断する手立てとなる。

しかし、人が現実的と思うことは、直接的に見たり触れたりできることだけに限られるわけではない。自分で確かめたわけではないけれど、海の向こうで戦争が起きていることは虚構ではなく現実のことと信じている。地球が丸いということも、見たわけではないし触ってわかるようなものでもないから確かめようもないけれど、宇宙に浮かぶ青い地球というイメージはきわめて現実的なものと感じられる。

我々は、確かめたことだけをリアルと感じるのではなく、確かめていないことでも現実的と感じる。確かめていないことの現実感を保証してくれるのは、媒介された情報である。我々は、自分では検証するのが難しい多くのことについての知識をもっている。科学的な知識や慣習的知識は、確かめていないことについての現実感覚を支える。

---

18) 認識において、表象を認知的に構成する機能と、荷重を備給して現実感を構成する機能は、基本的に独立の系であると考えられる。表象の構成は正常であるにもかかわらず現実感が感じられない、という離人症の症状は、2つの系が独立であることを示唆している (木村 1990; 大饗ほか 2001)。

19) 予期として現実を構成することは、不確定な状況に対処する生物学的戦略と考えられる。予期の投射によって、不確定な状況の複雑性を縮減し、行為を可能にする。

20) 唯物論的思考は、現実的なものの揺るぎない事実性を認識の真理としてとらえる。しかし、G. ティボンが指摘するように、しばしばそれは「もの」という観念を信奉する観念論と見分けがつかなくなることもある (Thibon 1974=1976: 24)。

P. L. バーガーとT. ルックマンが指摘したように、社会的な知識によって現実が裏付けられるという信念によって、我々は現実感を得ている。人間の現実、知識への信頼をもとにして社会的に構成されている (Berger & Luckmann 1966=1977)。

自分の見ていないところで何が起きているのか、ということを把握することは、人間にとって死活問題にもなる。直接検証不可能な状況で不確定性に対処するために、予期による現実構成が必要になる。

ここで、メディアの機能が問題化する。社会的知識は、他者から伝えられる。メディアが伝える情報に全面的に依拠するとき、我々の社会的現実、洗脳やマインド・コントロールの危険にさらされることになる<sup>21)</sup>。

メディアは、出来事についての情報を「事実」として価値中立的に伝えるかも知れない。しかし、情報としての強度を有する情報は、荷重を帯びた情報である<sup>22)</sup>。正負の予期を強く喚起する情報は、リアリティとしての強度が強い。反対に、あまり予期を喚起しない情報は、リアリティとしての強度が弱い。媒介された情報の信憑性は、対象・媒介・主体を結ぶソシオン・ネットワークの配置と動作にもとづいて構成される。

もちろん、人はいつでもメディアを全面的に信じているわけではない。信頼／不信を判断することによって、選択的にメディアからの情報を摂取する<sup>23)</sup>。対象に関する情報を伝える複数のメディアのネットワーク動作を理論化した多重媒介モデルは、正負の荷重を担う情報の複合的処理によってネットワーク拘束的に社会的現実が構成されるメカニズムを説明する。以下では、多重媒介モデルの理論的射程について検討する。

## II-2. 認知的不協和

トリオン変換による不安定から安定への移行は、部分的にL. フェスティンガーの認知的不協和理論と重なるところがある (Festinger 1957=1965)。ここで、認知的不協和とトリオン変換の理論的差異について検討しておく。

ごく大雑把にいうと、認知的不協和理論とトリオン変換の差異は、フェスティンガーが個体の心理的不快をベースとして不協和／協和を定義するのに対して、多重媒介モデルは

21) メディア (媒介者) を全面的に信頼している場合、自分の目でみたことさえ疑うということがあるかも知れない。この目で見たのだから本当だ、と思うことがある一方で、我が目を疑う、ということもある。ミイラ事件のケースでは、信者にとっては我が目よりもグルの言葉の方がずっとリアルだったのだ。

22) メディア自身が情報をリアルな事実としてあつかうためにも、情緒的価値付与は必要になる。

23) 洗脳やマインド・コントロールは、単純に何かを信じ込むことではなく、何かを信じることで別の何かに対する徹底した不信が組み合わさることで思考停止に陥る状態として理解すべきである。とりわけ、カルト宗教の事例では、不信の機能が重要な意味をもつ (渡邊 2003; Watanabe 2004)。

個体ではなく関係パターンをベースとして不安定／安定を定義するという点に認められる。

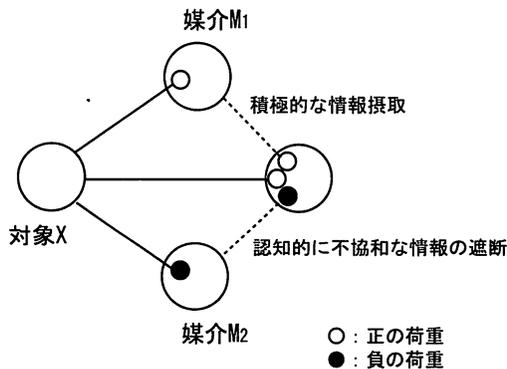
たとえば、対象への評価について、私が良いと評価するものを誰かが悪いと評価する。そのとき、その誰かが私の信頼する人であった場合、私・他者・対象の3項はトリオンの不安定パターンに陥る。このようなとき、何が起こるか？

フェスティンガーの認知的不協和理論は、このような不安定状態を要素間の関係についての認知が不協和を産み出す状況として捉える。フェスティンガーによると、「不協和の存在は心理学的に不快であるから、この不協和を低減し協和を獲得することを試みるように、人を動機づけるであろう」(Festinger 1957=1965: 3)。不協和の低減に向けての圧力によって、要素間の関係は協和した状態に移行する。

私・他者・対象の3者の場合、私が対象への評価を変えるか、他者への信頼を取り下げるか、対象についての他者の評価を変化させることによって、認知的不協和は除去される。私が対象や他者に対して抱く感覚や感情は、それぞれ孤立したものではなく互いに関係付けられている。情報理論的にみると、この点が認知的不協和理論の核心となる洞察である。

さらに、フェスティンガーは「不協和が存在しているときには、それを低減しようと試みるだけでなく、さらに人は不協和を増大させられる状況や情報を、すすんで回避しようとするであろう」(Festinger 1957=1965: 3)という。認知的に不協和な状況は、特定の要素に関連する新たな情報が入力されたときに発生する。したがって、不協和を回避するためには、不協和志向的な情報に対して事前に手を打っておくことが有効になる。

私が正の評価を下した対象Xについて、正の評価を下すM<sub>1</sub>と負の評価を下すM<sub>2</sub>が存在するとき、私はM<sub>1</sub>、M<sub>2</sub>それぞれが配信する情報に対して、どのような態度を形成するだろうか(図Ⅱ-2)。



図Ⅱ-2 認知的不協和

認知的不協和を軽減し、認知的に協和した状態を強化するためには、自分と同じように対象に正の評価を下す $M_1$ の情報を積極的に摂取し、評価の異なる $M_2$ の情報を積極的に遮断するという情報濾過が要請される。

同一意見の情報の積極的摂取に関して、フェスティンガーは、自動車の所有者が自分が所有する自動車の広告を積極的に読む傾向があることを実験によって証明している (Festinger 1957=1965:53)。自分が所有する自動車に正の評価を下したい持ち主は、自動車の魅力を積極的に宣伝する広告の情報を積極的に摂取する傾向がある。

また、反対意見の情報の積極的遮断の例として、フェスティンガーは、被喫煙者に比べて喫煙者の方が有意に喫煙と肺癌の関係についての情報を拒否する度合いが高いことを示している (Festinger 1957=1965:148)。

フェスティンガーの認知的不協和理論は、多重媒介モデルに組み込まれたトリオン変換の不安定から安定への移行に関するモデルを提示する。ただし、フェスティンガーは不協和を低減させるための認知的要素の変化が現実による抵抗を受けるということについて、常識的観念にしたがっているように思える。たとえば、経済的損失や身体的苦痛を伴うような認知的要素の変化は、現実に対する即応性 (responsiveness) をもつため、強い抵抗として作用するとフェスティンガーはいう。

一方、多重媒介モデルは、たとえそれがソシオンの個体にとって苦痛や損失を伴うものであるとしても、ネットワーク動作の必然として特定の社会的現実が選択的に構成されるということがある。そして、ネットワークのなかでその位置を占めているソシオン個体にとっては、それが必然的で不可避の唯一の現実として機能する。したがって、ここではその外部に基準となるような現実の即応性を想定することはできない。なぜなら、それ自体が現実だからである。

さらに、ネットワークのなかでの荷重の変換を理論化する点も多重媒介モデルの特徴と考えられる。個別の選択的状況に関する社会心理メカニズムだけでなく、ネットワークとして結ばれた全体のシステムをモデル化することで、より包括的な説明が可能になる。多重媒介モデルの射程としては、意味世界やイデオロギーの構成まで含む。

### II-3. 信頼と不信の判断

多重媒介モデルによると、情報論的現実構成は信頼／不信の布置に大きく依存する。相手が信頼できるかどうかについての判断は、相手についての情報の綿密な吟味から導出されるわけではない。多くの場合、「何となく信頼できそう」「何となく怪しい」といったか

たちで、直感的に判断している。信頼／不信の判断が、対象に関する情報の綿密な吟味を経なければならないとしたら、日常的に人が処理しなければならない情報量は膨大になってしまうだろう。そして、信頼できるかどうかという判断に一生の大部分を費やすことになりかねない。

3項関係の荷重演算は、対象に関する吟味を省略して、直感的な信頼／不信を導出するメカニズムとして機能する。多重媒介モデルは、信頼／不信における直感的要素の生成を説明する枠組を提示する。

何らかの直感的要素は、信頼／不信の生成に不可欠と考えられる。たとえば、対象に関する綿密な吟味を仮定するJ. コールマンの合理的選択モデルにおいても、信頼／不信の直感的要素は排除しきれずに残されている。コールマンの信頼モデルは、次の式で簡潔にあらわされる (Coleman 1990)。

$$\begin{aligned} \text{信頼} : \quad & \frac{p}{1-p} > \frac{L}{G} \\ \text{保留} : \quad & \frac{p}{1-p} = \frac{L}{G} \\ \text{不信} : \quad & \frac{p}{1-p} < \frac{L}{G} \end{aligned}$$

$p$  = 利益を得る機会 (信頼の対象が信頼に値する場合の蓋然性)

$L$  = 潜在的喪失 (信頼の対象が信頼に値しない場合)

$G$  = 潜在的利益 (信頼の対象が信頼に値する場合)

信頼が報われる蓋然性 (probability) を  $p$ 、潜在的喪失 (potential loss) を  $L$ 、潜在的利益 (potential gain) を  $G$  とすると、信頼性の比率が得失比率を上回るときには信頼し、信頼性の比率と得失比率が同じときには保留、信頼性の比率が得失比率を下回るときには信頼しないという決定が導かれる。

コールマンの信頼モデルにおいて、 $L$  も  $G$  も明確に測定可能であるが、 $p$  だけが幾分不明瞭なままにとどまっている。 $p$  は、相手が信頼できる見込み (蓋然性) をあらわしている。しかし、相手が信頼できるかどうかという見込みこそ、日常的な意味で人が信頼という言葉によって指し示している事態ではないだろうか。相手が信頼できそうだ、あるいは、この人を信頼すると裏切られそうだ、という見込みの判断は、すでに相手に対する私の信

頼を含意するのである<sup>24)</sup>。

したがって、信頼／不信の判断をモデル化するためには、pがどのようにして発生するのかを説明しなければならない。蓋然性に関する判断は、どのような情報処理に依拠しているのだろうか。

信頼／不信の蓋然性に関する情報は、対象そのものの属性だけではなく、対象が埋め込まれた社会的文脈も含んでいる。現実的条件として、人は生まれ落ちた最初から特定の社会ネットワークに埋め込まれているのであり、その人が何者であるかということは、その人がどのようなネットワークに埋め込まれているか、ということにかなり依存する。

ソシオンの多重媒介モデルは、ネットワークの運動から信頼／不信の蓋然性が発生する仕組みを説明する。ネットワークの連鎖にもとづく荷重の変換によって、「何となく信頼できそうだ」「どうも怪しい」といった肯定的／否定的予期が生まれる。

予期は、意識的な判断としての予測とは違って、「何となく」「直感的に」そうと感ぜられるものである。予期は、予測よりも予感に近く、より身体的な感覚と考えられる。

予期は感覚としての身体性を伴うため、いったん予期が発生するとリアリティとしての確実性が生まれる。ネットワーク動作から演算された予期の配列は、そのまま現実感の構成に接続している。

#### II-4. トリオン変換

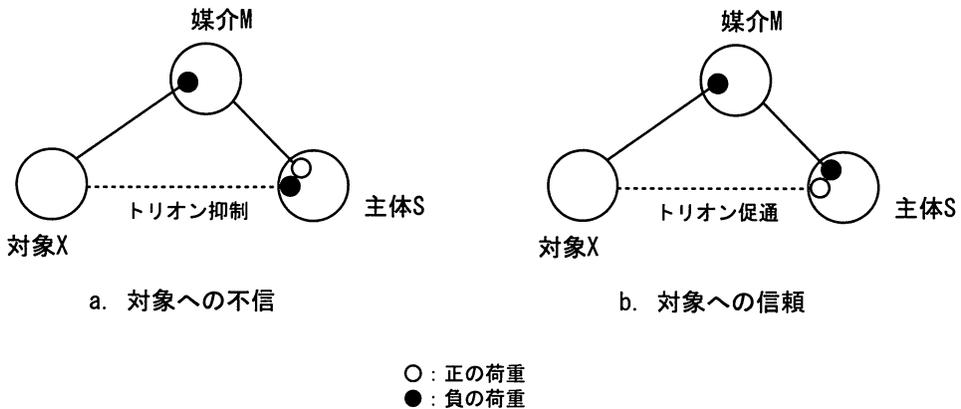
信頼／不信を導く決定的な要素を予期として捉える際に、ソシオン理論の枠組で重要なのは、ネットワーク動作によって予期の正負が変換されるという点である。対象についての情報から信頼／不信を判断するというダイアッド・モデルにおいては、不信は対象との交流を遮断するということを意味するに過ぎない。信頼できない相手とは、交渉しないというわけである。

しかしながら、信頼／不信を第3項の媒介との関連で捉えるトライアッド・モデルでは、不信はネットワークのなかで信頼または不信を増幅する機能を担う。不信で結合されたネットワークは、単なる交渉の遮断ではない。トリオンの荷重演算論理は、不信の回路を巡り巡って信頼／不信を算出する。

予期の演算出力を規定するトリオンの荷重演算論理は、 $P * P \rightarrow P$ 、 $P * N \rightarrow N$ 、 $N * P \rightarrow N$ 、 $N * N \rightarrow P$ という記号式であらわすことができる。Pは正の荷重、Nは負の荷重

24) 合理的算定による信頼の賦与という仮定は、信頼という現象を説明するのに適さない。信頼は、不確実な状況において暫定的に確実性を産出するシステムの営為として理解できる (渡邊 2003)。

をあらわす。荷重演算論理は、3項関係において、P3つか、N2つとP1つとき安定するというF.ハイダーの均衡理論を予期の演算として展開したものである(Heider 1946, 1958=1978)。この演算は、信頼/不信の生成に適用できる(図Ⅱ-4)。



図Ⅱ-4 信頼と不信

図Ⅱ-4 aは、 $P * N \rightarrow N$ の荷重演算論理によって、信頼と不信のネットワーク結合から不信が発生するメカニズムを示している。負の荷重を賦与した相手に対しては、聞く耳を持たなくなる。このようなトリオン動作を、トリオン抑制 (trion inhibition) という。

図Ⅱ-4 bは、 $N * N \rightarrow P$ の荷重演算論理が作動して、不信のネットワークから信頼が生まれるメカニズムを示すものである。このトリオン動作は、他者から入力される否定がかえって肯定の効果を強めてしまうというネットワーク反対効果の一部をなすものである。一方への否定が他方への肯定を促進するトリオン動作を、トリオン促通 (trion facilitation) という。

いずれも、不信は単なる情報遮断を意味しているのではなく、ネットワーク上の信頼/不信の回路を経由して、最終出力としての対象への信頼/不信を生み出すという積極的な機能を担う。

負の荷重で結合している場合、信用できない人との接触を回避する、という行動をとることがある。さらには、たとえ接触が避けられなくても、聞く耳を持たない、あるいは、聞いても聞き流すという形で、情報を摂取しているにもかかわらず、影響を遮断することが無意識のうちになされる。

自分が相手から不信を抱かれている場合には、どれだけ説得しようとしても、馬耳東風、馬の耳に念仏、ということになる<sup>25)</sup>。トリオンのなかで不信の関係がロックした場合、ネットワークのなかを情報が流れるとしても、そのことが有意な情報として機能しなくなってしまうのである。

負の関係が十分に強い場合、情報を聞き流すだけではなく、反転して受け取るという情報摂取の可能性も考えられる。たとえば、文学作品の評価に関して、自分の信頼している批評家が正の評価を与える作品は、自分も正の評価を安心して与えることができる。しかし、自分の嫌いな批評家が正の評価を与える作品には、むしろあえて負の評価を与えるという感情論理が作動することがある。あるいは、非行少年にとっては、規則で禁止された行為がかえって魅力的に見えてしまうということがある。負の関係で結ばれているなかで、否定の情報が肯定に読み替えられて、肯定の情報が否定に読み替えられるのである。

信頼／不信は、ネットワークから独立した個人的な判断だけから生まれるものではない。その人が埋め込まれたネットワークの演算論理にもとづいて、信頼／不信が出力される。トリオン変換の視点は、不信を信頼の欠如ではなく負の信頼として捉えるソシオン理論の荷重概念にもとづく。不信による結合は、信頼と不信の両方を理解する上で重要である<sup>26)</sup>。

信頼研究に不信の視点を組み込むと、従来の社会学的発見に関して負の関係のオプションを付加することができる。たとえば、信頼研究において、媒介者や社会的認定された資格によって信頼性が高められることが指摘されている (Coleman 1990; Sztompka 1999)。わかりやすくいうと、保証としての媒介者や資格は「太鼓判」として機能する。

ここで、負の関係の視点を導入すると、負の保証という概念を想定することができる。「あの人は信頼できる」という正の保証と違って、負の保証には、「あの人は信頼できない」という否定的な評価を強化する働きがある。

一般的に、信頼が不信に転化するのは一瞬で済む場合があるのに対して、不信を信頼に転化するためには、長い時間がかかる。失われた信頼を回復するのは、容易ではない。オオカミ少年は、「嘘つき」というレッテルを貼られることによって負の保証を与えられた。

25) カルト宗教にはまった信者を家族や友人が説得しようとしても、なかなかうまくいかないのは、このネットワーク不信のせいと考えられる (渡邊 2003)。

26) 社会の原型は3者関係であるというジンメルの洞察は、トリオン変換の論理と一致する (Simmel 1908=1994 a, b)。また、精神科医の笠原嘉によると、対人恐怖症の患者はしばしば2者関係では落ち着いて振る舞うことができるが、3者以上の関係に置かれたとき極度に緊張が高まって症状を発現するという (笠原 1977)。この事実は、3者関係において、2者関係には見られない固有の社会性が発生することを示唆している。2者関係と3者関係の決定的な差異は、前者が自己と他者の関係のみを含むのに対して、後者は自己と他者の関係だけではなく他者と他者の関係も含む。他者と他者の関係が自己のサブスペースに内在する。この事実が、個体の内面と社会ネットワークの自己組織化を接続している。

負の保証があるために、誰も彼の言葉を信用しなくなった。負の保証は、信用を剥奪した上で、さらに不信の評価を確定する。

しかし、自ら責任を負うべき行為によって信用剥奪されたのではない場合でも、負の保証のレッテルが貼られる場合がある。E.ゴッフマンが描き出したように、しばしば差別現象において見出せる負の保証として機能するスティグマは、本人にとって対他的な社会的アイデンティティと即時的な社会的アイデンティティの間に特殊な乖離を引き起こし、社会関係における逸脱者としての振る舞いを規定する特殊な相互行為状況を準備する(Goffman 1963=1987)。自身のスティグマを負の保証と認識する人は、他者からの負の評価を自己のアイデンティティのうちに組み込むことになる。スティグマへの対応が、自己として固着してしまう<sup>27)</sup>。

主体にとって、特定の他者が信頼の配置において重要な意味をもつ、ということがある。子どもにとっては父親や母親が、自己の信頼／不信の判断を全面的に委ねることのできる他者となる。H. S. サリヴァンは、このような発達過程における「重要な他者」の役割を重視している(Sullivan 1953=1976)。重要な他者とのかかわりを通して、人は全幅的に人間となる。

サリヴァンの重要な他者は、正の関係で結ばれた他者である。したがって、ソシオン理論の観点からすると負の関係で結ばれた他者も、同様に発達過程で重要な役割を果たすと考えられる。

マス・コミュニケーション研究におけるオピニオン・リーダーの概念にも、負の対応物を想定できる。1940年代以降のマス・コミュニケーション研究において、個人とマス・メディアの中間領域で対人関係がきわめて重要な役割を果たすことが明らかにされている。マス・コミュニケーションは、マス・メディアからダイレクトに個人に影響するのではなく、諸個人を結合するパーソナル・ネットワークを経由した上で個人に影響を与える<sup>28)</sup>。オピニオン・リーダーの意見は、正の方向で他の人々の態度形成における影響力を発揮す

27) ゴッフマンは、特定のスティグマをもつ人が類似の学習経験とアイデンティティ形成の過程(moral career)をもつことを指摘する。「この社会化過程の一つの局面は、スティグマのある人が、常人の視角を学習し、自己のものとする過程であって、これを通して、彼らは包括社会のアイデンティティに関する信憑と、何らかのスティグマをもつとはいかなることなのかということに関する一般的見解を習得する。他の局面は、彼が特定のスティグマをもち、そして今度はそれをもつことに由来する帰結を詳細に知る過程なのである」(Goffman 1963=1987: 57)。

28) E. カッツとP. F. ラザースフェルドは、中規模年に居住する女性を対象とした実証的調査の結果からオピニオン・リーダーの特徴を次のようにまとめている。(1)買い物のリーダー：比較的大きな世帯の既婚女性で、社交性が高い。(2)流行のリーダー：社交性の高い若い女性で、階層的に上層の女性がリーダーになりやすい傾向があるが、必ずしも決定的な要因ではない。(3)社会的・政治的問題のリーダー：社会的地位の高い女性で、とくに夫と父親の役割の影響が大きい(Katz & Lazarsfeld 1955=1965: 337-338)。

る。それに対して、負のオピニオン・リーダーの意見は、他のオーディエンスにとって否定的なかたちで作用すると考えられる。

具体的な個別の他者ではなく、一般化された概念としての他者性についても、負の対応物を考えることができる。G. H. ミードは、個別の反応を抽象化することで得られる一般化された他者の概念が、社会性の発達段階において出現することを指摘している (Mead 1934=1973)。人は一般化された他者を参照項として、集団のなかでの自己の振る舞いを決定する。人間が社会的に振る舞うことができるのは、一般化された他者の態度を採用するからである<sup>29)</sup>。

社会性の参照項として想定されている点で、ミードの一般化された他者も、正の関係で結ばれた他者である。そして、当然ここでも我々は負の一般化された他者という概念を想定することができる。負の一般化された他者の概念は、それを採用しないという形式で否定的に自己の社会性に影響を与えると考えられる。

## II-5. 現実の否認

信不信のネットワークがトリオン変換によって安定状態を確立すると、推論は確信に転化する。その結果、信頼しないメディアからの情報に対しては、情報を遮断するか、あるいは反対に情報を反対に受け取るという態度が形成される。情報を反対に受け取るというのは、信頼しないメディアが「白」といえば、逆に「黒」と思うという態度である。安定状態が十分強力に確立されて、新しい情報入力に対する自由度が完全に失われると、硬直したイデオロギー的拘束が生まれる。イデオロギーは、思考の自由度がネットワークによって制限されたときにあらわれる認識と思考の拘束と考えられる。

ネットワークによる認識と思考の拘束に関する歴史的に深刻な例は、社会主義国家における粛清をめぐる西側諸国の反応のうちに見出せる。ソ連における粛清の事実、西側諸

29) ミードは、次のように指摘する。「もしある個人が、自我を最大限に発展させようというのなら、人間的・社会的プロセスのなかで他の個人たちのかれにたいする態度、およびおたがいどうしの態度をとり入れるだけでは不十分である。また、そういう社会過程の全体を単にそういう観点からかれの個人経験にもちこんだだけでも不十分である。かれは、かれ自身およびおたがいどうしへの他の個人たちの態度をとりあげるのと同じやり方で、組織化された社会もしくは社会集団のメンバーとして、かれらが従事している共通の社会活動や社会事業のさまざまな局面にたいする他人たちの態度をもとりあげねばならない。さらに、その組織化された社会もしくは社会集団それ自身が全体としてもつ個人的な態度を一般化することで、ある特定のときに遂行されているさまざまな社会的計画を念頭に置いて、またその【社会や社会集団の】生を構成していて、個々の計画がその特別の表現になっている一般的な社会過程を念頭に置いて動作しなければならない」(Mead 1934=1973:166)。そして、ミードは民主主義政治こそが、他者の一般化された態度を可能な限り採用できるようなコミュニケーション・システムの発展に寄与すると考えていた。

国において長らく無視されてきた。

歴史学者のS.クルトワは、なぜ共産主義の犯罪が20世紀末に至るまでまともに学問的考察の対象にならなかったのか？ という問いを投げかける。

とりわけ80年にわたって人類の約3分の1を四大陸において襲った共産主義の大惨事に関して、なぜ「学会」はこのように沈黙しているのだろうか？ 共産主義の分析の中心に、本質的な問題として人類に対する集団的・体系的犯罪を据えないのは、いったいなぜなのだろうか？ 我々がこれらの問題を理解することが、どうしてもできないというのだろうか？ それよりも、むしろ絶対に知りたくない、理解するのが恐ろしいからではないだろうか？ (Courtois 1997=2001: 26)

ナチスの虐殺については、多くの学者が真摯に取り組んでいるし、『夜と霧』『ショアー』『ソフィーの選択』『シンドラーのリスト』など、社会的影響力の大きい映画も多数作られている。それに比べると、共産主義の犯罪についての同様の研究は圧倒的に少ない。

共産主義の犯罪が見過ごされてきた理由のひとつとして、クルトワは共産主義の理想に対する希望があったことを指摘する。

当時共産主義はその明るい面を見せていた。それは啓蒙であり、社会的・人間的解放の伝統であり、「真の平等」と、グラックス・バブーフが最初に言った「万人の幸福」の夢であった。そして、この明るい面が、闇の面をほとんど完全に隠蔽していたのだった。(Courtois 1997=2001: 29-30)

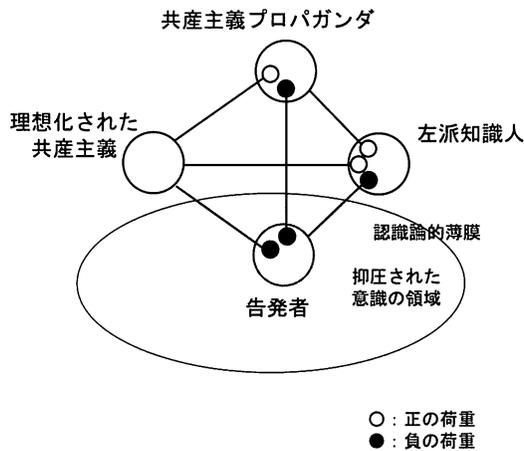
革命の理念を信奉する西側の共産主義者および左翼的知識人たちは、その革命的情熱ゆえにソ連の無謬性を無批判的に信じていた。「彼らは東側諸国では『社会主義が建設中』であり、民主主義諸国では社会的・政治的対立を生んでいるこのユートピアが『あっち』では現実になっていると信じていたのだった」(Courtois 1997=2001: 29)。

ソ連の人道的な罪に対する告発は、トロツキストやアナキストによって行なわれてきたが、それは効果的ではなかった。なぜなら、政治的に対立する告発者の告発は、特殊に政治的な意味をもつ告発として、信憑性を削がれてしまうからである。

それでも、ときおり、ソルジェニーツェンの『収容所群島』のように西側諸国の注目を集める告発があったが、それさえもすぐに沈黙のうちに葬られるのだった。

長い間、証言や記憶のほとぼしりや、あるいは個人のイニシアチブで作られた独立の委員会——ダヴィド・ルッセの強制収容所体制に関する国際委員会やスターリンの犯罪の真実に関する委員会など——の仕事は、共産主義のプロパガンダの大きな音に消されて、臆病な、あるいは無関心な沈黙のうちに捨て置かれた。この沈黙はある著作の出版——たとえばソルジェニーツェンの『収容所列島』——や他のどんな証言より明白な作品——たとえばヴァルラム・シャラーモフの『コルィマ物語』やピン・ヤタイの『殺人のユートピア』[英訳『生き残れ、わが息子よ』]——などが出た時には、興味がかき立てられて、ひととき打ち破られるが、たいていの場合そのあとふたたび黙ってしまうのが常だった。(Courtois 1997=2001: 34-35)

理想の信奉が十分に固定していると、否定的情報は遮断される。そして、理想の輝きはいつまでも維持される。そのことが、現実の直視を拒否することにつながってしまうのである (図Ⅱ-5)。



図Ⅱ-5 共産主義国家の神話

4項の関係がトリオンの安定パターンに入るので、情報が伝達される正負の経路は固定する。トリオンが緊密にロックしたネットワークにおいては、新しい情報がネットワークの変化を促すことが非常に難しくなる。共産主義のイデオロギーによって、ネットワークが硬直化し、粛清の告発に耳を貸さないシステムが構築される。認識論的な薄膜に隔てられて、告発者の伝える情報は届かない。

E.モランは、情報理論的視点からイデオロギーを情報濾過の観念組織として捉えている (Morin 1981=1991)。イデオロギー構造は、情報を濾過し、選別する機能を担う。モランは、思考システムにおける情報の濾過について次のように指摘する。

われわれの思考のシステムは情報を濾過する。われわれの知りたくない情報は、無視され、検閲され、埋められ、分解されてしまう。ナチの収容所の存在を知りたくなかったドイツ人はこれを無視した。1945年になっても、一般ドイツ人たちは死の収容所の話や写真を虚偽の宣伝と思っていた。ソ連の収容所の存在を知りたくなかった共産主義者達は、これを無視した。アルジェリアで拷問の行なわれたことを知りたくなかったフランス人はこれを無視した。わたしはある友人に『収容所列島』を読むよう1年間にわたって懇願したが、彼女は時間がないといった。その実、ガタリやラカンを読む暇はあったのである。(Morin 1981=1991:35)

自分が信じている理想が実は道徳的に許されないものだった、ということは信じ難い。理想(あるいは自分が所属する集団)への正の荷重は、理想に対する負の評価を遮断するトリオン動作を導く。ここで注意すべきは、「われわれの知りたくない情報」は、心理的な抵抗によって否定されるのではなく、ネットワークのパタンによって必然的にトリオン抑制されるという点である。したがって、「知りたくない」という表現は心理的虚偽を含意するように思えるが、実際には存在論的な拘束を意味すると考えられる。

## II-6. 社会的存在拘束性

トリオン変換の概念によって、認識と思考の制約について理解することができる。ネットワークの配置によって、現実がどのように認識されるか、ということが決まる。思考は、認識された現実を前提として作動する。したがって、認識と思考を根本的に規定しているのは、社会的現実を構成するネットワーク動作と考えられる。

思考の制約は、思考する主体における現実の構成にもとづく。K.マンハイムは、認識と思考が社会空間上の位置によって拘束されるという社会的存在拘束性について、それが単なる心理学的平面だけの問題ではないことを指摘している (Mannheim 1929=1971)。社会的存在拘束性の視点は、所与の現実に対する心理的偏向という意味ではなく、そもそも現実が異なるという意味での存在論的平面を問題とする。

作為や虚偽の心理にもとづく部分的イデオロギー概念ではなく、全体としての意識構造

を想定する全体的イデオロギー概念は、利害関心を越えた存在論的領域にかかわるのである。

部分的イデオロギー概念にとって前提となっているのは、あれこれの利害関係が原因となって、ああいふ嘘や隠蔽がひきおこされる、ということである。全体的イデオロギー概念の場合は、これこれの見方、観察様式、視点には、これこれの現実的な状況が対応している、というふうと考えられる。(Mannheim 1929=1971:168)

ネットワーク上で多重媒介的にトリオン拘束された主体の思考は、マンハイムの全体的イデオロギー概念が適用されるべき対象のひとつである。認識と思考の制約は、個人や集団の利害関心だけに制約されるのではなく、主体が置かれた全体社会的状況によって制約される。多重媒介モデルは、その全体社会的状況を複合的に構成されたネットワークとして捉える。

意味世界としての現実には、トリオン変換を内蔵したネットワーク動作によって構成される。世界をどのようにして捉えるか、ということは、ソシオン個体が各々のサブスペースにどのようなネットワーク・パターンを起動するかによって違って来る。

人が素朴に現実として認識している事象は、じつは複数の異なる現実がぶつかりあう場である。ある現実を生きるということは、異なる複数の現実的可能性からひとつの現実が選択的に実現される政治的過程のうちにある。トリオン変換は、そうした意味の政治学における基本的な関係原理をあらわすものと考えられる。

## II-7. ロックと高圧化

トリオン変換によって安定パターンに入った関係は、その状態でロック (lock) する。すなわち、関係の正負のパターンが固着して、容易に別のパターンに移行するということがなくなる。ソシオン理論の仮説によると、安定パターンでは正のフィードバックが作用して、正負の関係が時間の進行にともなって強化されていく<sup>30)</sup>。

安定トリオンは、納得と確信の感情を産み出す。トリオンが安定パターンに入ったとき、

30) サイバネティクス的なシステム論では、恒常状態からの逸脱を適宜修正して収斂させる負のフィードバックをシステムの安定状態の原理として想定する。それに対して、ここで想定する正のフィードバックのシステムは、運動的ポテンシャルを一定に保つのではなく、しだいに高まりながら安定する秩序をつくり出す。日置弘一郎は、システムの変化を動的に捉えるためには、正のフィードバックによる秩序形成に目を向ける必要があると指摘している (日置 2001:209)。

「なるほど!」「腑に落ちた!」という感覚が発生する。確信の感情は、情報のなかから安定トリオンの枠組に合致するものを選択的にくり込むことによって強化される。また、単なる時間の経過も安定パタンを強化すると考えられる。持続したものを変化させるのは、時間が経てば経つほど面倒になる。

ネットワーク上の荷重の配置は、認知的イメージの構成にも影響する。正の荷重を賦与した対象は、「アバタもエクボ」として対象の属性がことごとくすぐれているように感じられるだろう。反対に、負の荷重を賦与した対象は、「エクボもアバタ」で対象の属性そのものが劣悪であるように感じられるだろう。

我々は、対象の属性によって対象を評価すると思いついでいるが、多くの場合、対象の属性は主体の賦与する荷重の関数であると考えられる。S.フロイトの「惚れ込み」概念は、対象に対するリビドー備給によって対象が輝いて見える機制を説明するものである(Freud 1921=1970)。フロイトによると、惚れ込みは対象の「性的な過大評価」をもたらす。惚れ込まれた対象は、惚れ込まれていない対象に比べて、そのすべての性質がより高く評価されるのである。対象の魅力によって惚れ込みが起こるように思えるが、実際には惚れ込みによってはじめて対象が魅力的に見える。

トリオンが安定状態となって、ネットワークを環流する荷重が正のフィードバックによって増大していくと、関係が高圧化する。高圧化したトリオンは、安定パタンに符合しない情報に対する免疫的反応を示す。正の荷重を賦与する対象に関する否定的な情報や、負の荷重を賦与する対象に関する肯定的な情報は、「まさか!」「そんなはずがない!」として否認されてしまう。安定パタンが指示する現実こそ、唯一の絶対的に正しい現実として感じられるのである。

理想を目指した運動における虐殺や粛清といった悲劇は、ロックしたトリオンの高圧化として描き出すことができる。ここでは、魔女狩りの例を取り上げる。森島恒雄が指摘するように、魔女狩りが旋風を巻き起こしたのは中世暗黒の時代ではなく、合理主義とヒューマニズムが開花したルネサンス最盛期から初期近代においてであった(森島 1970: 6-7)。魔女狩りは、単なる野蛮な非合理主義の産物として片付けるわけにはいかない<sup>31)</sup>。

もともとヨーロッパでは、民間伝承や民俗宗教として魔女や悪魔の観念があった。民間

31) ただし、中世が理性の眠る暗黒時代だったという歴史観は、多くの歴史学的研究によって否定されている事実である。ここでの強調点は、宗教的コスモロジーが公式の世界観として実効的に機能していた中世ではなく、人間的コスモロジーが芽生えつつあった初期近代において魔女狩りが猛威を振るった、というところにある。

伝承での魔女や悪魔は、意地悪で人間臭い悪事を働く精霊というようなものだった。やがて、キリスト教が定着するようになると、民間伝承のなかの精霊たちも異なる意味を獲得するようになる。魔女や悪神の観念は、しだいに神に対する絶対悪の地位を占めることになった。上山安敏は、「教父たちは聖書に立ち戻って、悪魔の概念にしがみついた。信仰が高揚すればするほど悪魔は実在するものとなり、憎悪が増した。異端への弾圧を契機に絶対悪としての悪魔が確立したのである」(上山 1998:82)と指摘している。

魔女裁判は、キリスト教の信仰に基づいて正義として行なわれた。裁判官は魔女の存在を信じていたので、敬虔な信仰に基づいて誠実に魔女たちを処刑していったのである。森島は、魔女裁判で使われる拷問の道具が「聖母マリア」に似せて作られていたことを指摘している(森島 1970:110-111)。それは、両腕を広げている女性像であり、胸と原野部分に尖った釘と鋭利な刃が一面に植え付けられているというものであった。拷問も神の名において行なわれていたのである。

主なる神への正の荷重と魔女に対する負の荷重がネットワーク結合し、安定トリオンを構成する。一方へのPと他方へのNは、トリオン変換によって相互増幅する。神に対して敬虔であればあるほど、魔女に対して厳しい態度が示されることになる。

魔女狩りの行為に関して、森島は、「そこでは、残虐、違法、偽善、欺瞞、貪欲、不倫、軽信、迷信、歪曲、術学、……およそ思い浮かべられる限りあらゆる不義、悪徳が、むしろ正義、美德として、なんのためらいもなく、確信に満ちて堂々と行なわれているのである。この確信が、あらゆる不義と悪徳を正当化している」(森島 1970:183)という。神の正義の名のもとに、正々堂々と残虐な行為が行なわれたのである。

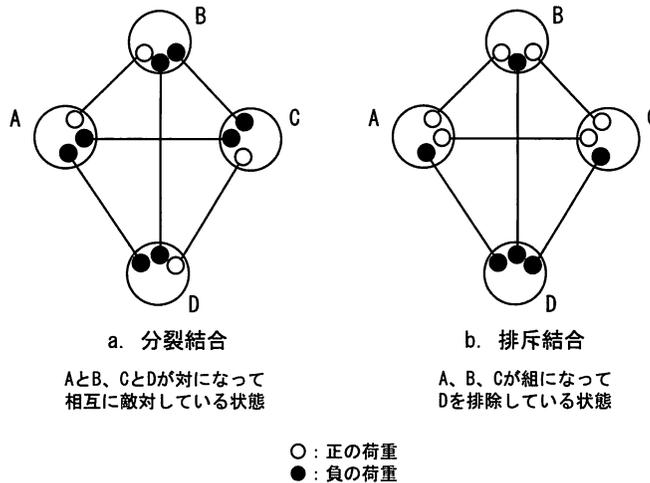
理想の実現のために、残虐な行為が遂行される。そうした悲劇は、魔女狩りだけでなく、21世紀に至るまでくり返されている<sup>32)</sup>。正義の旗印のもとで行なわれる、拷問、虐殺、粛清がある。

32) A. ケストラーは、人類が理想のために他者を血祭りにあげるといふ愚行をくり返してきたことに半ば絶望しながら、次のように述べている。「本来非理性的な人類という種に対して、快い理性を、といくら説教し続けても、歴史も示すように、これは正直のところ見込みのない企てだ。生物学的進化はもはや私たちを見棄てた。私たちは、必要な変化を人間の本性にひきおこさせて生物学的進化での欠陥を補う技術を開発した時にのみ、さらに生きのびていく希望がつけられる」(Koestler 1968=1969:441)という。ケストラーは、精神薬理学や生化学の発展による「心の制御」に救済の可能性を見出している。しかし、我々は一足飛びに生物的進化の可能性に賭けるのではなく、この問題を人文・社会科学的に考察することを続けたい。社会的現実を記述するオルタナティブなモデルを提示することで、血を流す手前でどうにか踏み止まる足場を築くことができると考えたい。

Ⅱ-8. トリオン複合

トリオン・ロックによる高圧化は、4つのトリオンが結合した4項関係をあらわすトリオン複合 (trion complex) において、集団的敵対状況での抜き差しならない闘争的結合に至る<sup>33)</sup>。3項関係の原理にもとづいて形成される4項関係のトリオン複合は、「我々」と「彼ら」という区別による社会形成の条件を示している。

トリオン変換によって、4項関係に含まれた4つの3項関係がすべて安定状態に入る場合、トリオン複合は8つのパターンが含まれる。4者全体が正の関係で結ばれる平和な4者結合を除くと、3者が結合して1者を排除する「排斥結合」と、2対2で対立する「分裂結合」に分かれる (図Ⅱ-8.1)。



図Ⅱ-8.1 トリオン複合

分裂結合 (図Ⅱ-8.1 a) または排斥結合 (図Ⅱ-8.1 b) としてロックしたトリオン複合は、すべてのトリオンが安定状態でロックしているために、ネットワーク全体を環流する荷重が極限的に増幅される。個々のトリオンの高圧化は、トリオン複合全体の高圧化を呼び込む。

トリオン複合の例として、パレスチナ問題について検討しよう。パレスチナ問題は、「解のない方程式」といわれるほど歴史的に複雑化した政治的問題である。19世紀のシオ

33) 木村らは、教室におけるイジメについて、加害者・被害者・傍観者・教員からなる4者のネットワーク・ダイナミックスとして分析する枠組を提示している (木村・松尾・渡邊 2001)。

ニズム以降、多くのユダヤ人がパレスチナに移住していった。ナチスによるユダヤ人迫害は、ユダヤ人のパレスチナ移住にいつそう拍車をかけることになる。第2次大戦後、イスラエルは国家としての独立宣言を行ない、それを認めないアラブ諸国との間で中東戦争(第1～4次)が起こった。

イスラエルは圧倒的な軍事力によってパレスチナを制覇し、入植による国家建設を進めていった。これに対して、パレスチナのアラブ人は、アラファトの指導するPLO(パレスチナ解放機構)を中心とするゲリラ的抵抗運動を開始する。パレスチナは、イスラエルによる軍事的進行とパレスチナ人によるテロリズムが交錯する恒常的な戦闘地域の様相を呈することになる。

1980年代後半にヨルダン川西岸やガザ地区で起こったインティファダ(蜂起)は、銃を発砲するイスラエル兵に対して投石で対抗する、というあからさまな戦闘能力の非対称性を示すものであり、国際社会の関心と同情を集めた。また、湾岸戦争の際に、イラクのサダム・フセインがクウェートからの撤退の条件としてイスラエルのパレスチナ撤退を提示したこともあり、米国が中東和平を重視するようになる。

和平交渉は、1993年に大きく動いた。ホワイトハウスの庭園でイスラエルのラビン首相とPLOのアラファト議長が、初めて暫定自治合意(オスロ合意)の相互承認に踏み切ったことを表明した。

しかし、パレスチナ地方にイスラエルとパレスチナという2つの国家を建設するという和平案は、容易に達成できるものではない。1995年、暫定自治合意を推進していたラビン首相は、和平に反対するイスラエル極右勢力によって暗殺される。その一方で、和平への妥協に反対するパレスチナ過激派のテロリズムも激化していった。和平は頓挫し、対立がいつそう激化していく。

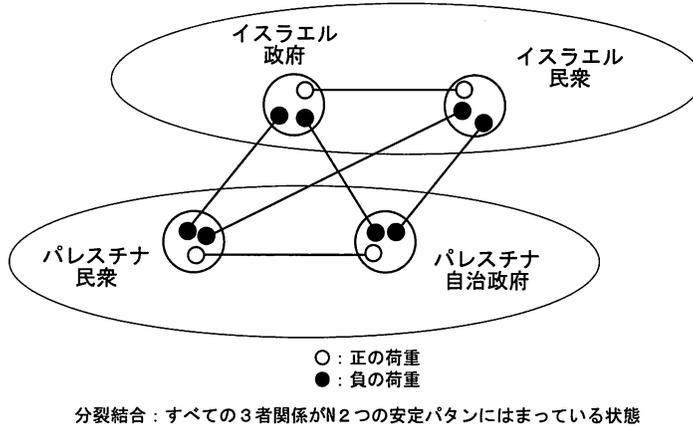
パレスチナの政治運動であるハマスの過激派によるテロリズムが激化すると、それに対するイスラエルの報復攻撃が行なわれる。そうして行なわれた報復に対するさらなる報復テロリズムが行なわれる。この循環を断ち切るのは、現状ではきわめて難しい。

暫定自治合意案は、イスラエル民衆とパレスチナ民衆の双方にとって受け入れがたいものだった。もちろん、イスラエル人もパレスチナ人も互いに憎しみ合って殺し合う状況ではなく、平和に暮らすことを望んでいる。なぜ、和平交渉は失敗に終わったのか。

パレスチナ問題は、イスラエル政府と民衆、パレスチナ自治政府と民衆のトリオン複合として記述することができる(図Ⅱ-8.2)。

図Ⅱ-8.2のトリオン複合は、パレスチナ問題の基本的対立を指示している。和平交

涉は、これ以上血を流すことをやめて、領土を分割することでパレスチナに2つの国家を並存させることを目指していた。

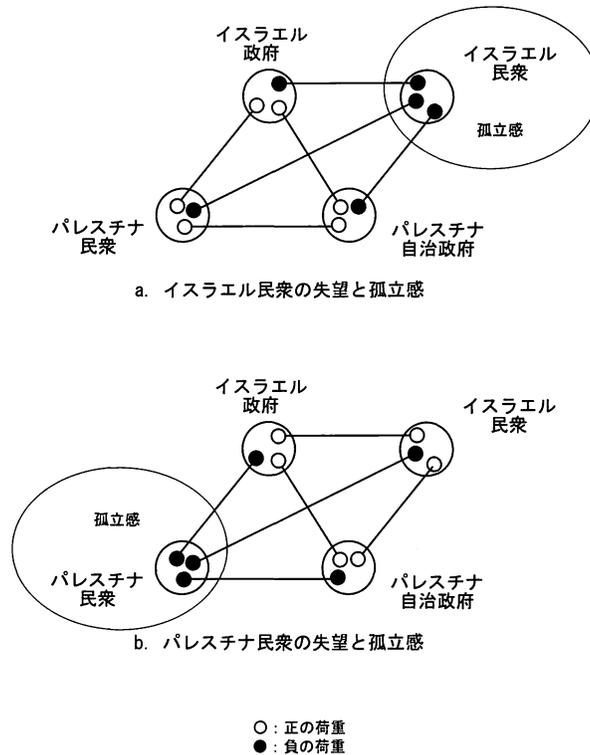


図Ⅱ-8.2 パレスチナ問題

しかしながら、それはイスラエル人にとっては、ラビン首相がイスラエルをパレスチナのテロリストに売り渡したかのように感じられた (図Ⅱ-8.3 a)。また、パレスチナ人にとっては、アラファト議長が迂闊にも決定的な譲歩をしてしまったように感じられた (図Ⅱ-8.3 b)。イスラエルとパレスチナ双方の民衆にとって、自分たちを代表する政府が、自分たちに敵対してあらわれたかのように感じられたのである。

イスラエルの民衆とパレスチナの民衆にとっては、ともに自分たちの指導者が自分たちを裏切って敵国と手を結んだかのように感じられた。そして、イスラエルの極右勢力とパレスチナの政治的過激派は、そうした民衆の不安を後ろ盾として、暴力的手段によって和平の可能性を切断した。

パレスチナ人は、入植という旗印のもと、住んでいた家を追い払われて難民となったばかりでなく、治安維持のためにいっさいの抵抗運動は軍事的攻撃の対象とされている。イスラエル人は、平穏な日常のなかで自爆テロに怯え続ける。互いに敵の攻撃に怯えながら、敵を憎んでいる。



図Ⅱ－8.3 和平交渉の失敗

イスラエル人の作家D.グロスマンは、イスラエルとパレスチナの相互理解の困難について、次のように指摘する。

2つの民族の相互理解は不可能であるという絶望的な思いが、いまでは人びとの心を支配している。その原因はここにあるだろう。すなわちパレスチナ側は、互いの衝突が始まったのはイスラエル国家が設立された1948年からだと考えている。ところがイスラエル人の多くは、衝突が始まったのはアル・アクサのインティファダが発生した2000年9月からだと考えているのだ。(Grossman 2003=2004:230)

イスラエル人は、パレスチナに対する攻撃は自爆テロへの報復と考えている。パレスチナ人は、イスラエルによる軍事占領への報復と考えている。いずれも、自分たちが犠牲者であるということが攻撃を正当化することになる。

パレスチナにおける2つの国家の共存の可能性はあるのか。グロスマンは、国境によっ

で分かれた主権をもつ2つの「ふつうの国家」を建設することが必要であるという。そして、敵との対比で作られる自己定義ではなく、現状を出発点とした新しい自己定義を作るのである。

イスラエルとすべてのアラブ諸国との間に和平が確立されれば、そのときようやく、わたしたちも中東の一部であるという事実を自分のものにできる。わたしたちがここにいるのは官僚的な決定における地理上のまちがいの結果ではないこと、ここがこれから生活をいとなんでいく場所なのだとなんて納得できるだろう。イスラエルが自国を世界に向けて開いていくのはいいことだろう。もちろんこうした段階的な開放の試みも、パートナーがいなければおこなえない。そのためにはアラブ諸国がイスラエルを「癌のように増殖する帝国主義（アラブ世界の報道で、イスラエルはしばしばそう呼ばれてきた）」とみなさないこと、イスラエルを中東の刺激的で活気ある必須の部分とみなしてくれることが必要である。(Grossman 2003=2004:10)

完全な相互的抹殺を望まないのだとすれば、報復への報復は、どこかで終わりにしなければならない。新しい自己定義を確立するためには、ロックしたトリオン複合を解体する必要がある。パレスチナ側からは、E.サイドが同様の平和構築の可能性について考えている。

パレスチナの政界には徹底的な見直しが必要である。パレスチナ人の誰もが切望しているもの——尊厳と正義にもとづく平和、そしてそのもっとも重要な要素として、イスラエルのユダヤ人との穏当で平等な共存——を余すところなく代表するものに再編せねばならない。わたしたちは、苦しみつづけてきた国民の犠牲に長いあいだ少しも近づこうとしなかった指導者の見苦しいごまかし、みっともない立場のぐらつきを振り切らなくてはならないのだ。イスラエルの人々についても事情は同様だ。シャロン將軍のような人物によって最悪の方向に導かれているのだから。わたしたちに必要なのは、虐げられてきた精神を高揚させ、現在のあさましい状況の先を見させてくれるようなヴィジョンである。ほんとうに希求すべきものとして確固たる態度で人々に示されれば、そのようなヴィジョンは破綻することはない。(Said 2001=2002:61)

国家という枠組を確立して、イスラエル人とパレスチナ人が共存していく。そのために

は、負の荷重で高圧的に結合したネットワークを冷却する必要がある。過激派やテロリストの暴力は、高圧化したトリオン複合にもとづいて冷却を阻害する。しかし、そこを乗り越えないと平和的共存は実現できない<sup>34)</sup>。

集団的対立の原型をなすトリオン複合は、友／敵の区別 (C.シュミット) を明確化することで政治的諸関係における「我々」という集団の位置を確認し、抹殺すべき敵を現実的に指定する<sup>35)</sup>。

シュミットによると、敵／友の政治的対立が、宗教的・経済的・道徳的その他の対立を巻き込んで集団間の現実的で決定的な闘争的結束を招来するという。

現実の友・敵結束は、存在的に強力かつ決定的なものであるから、非政治的な対立も、それがこの結束を生じさせるとたんに、それまでの「純」宗教的・「純」経済的・「純」文化的な意識や動機は後退させられ、いまや政治的と化した状況からくる、まったく新しい、独特の、そして「純」宗教的・「純」経済的等々の「純粋な」出発点からみれば、ときにひどく矛盾する「不合理な」諸条件、諸帰結に支配されることになる。いずれにせよ、重大事態をふまえての結束だけが、政治的なのである。その結束は、それゆえ、つねに決定的な人間の結束であるし、したがって、政治的単位は、およそそれが存在するかぎりにはつねに、決定的単位なのであって、かつ、例外的事態も含め、決定的事態についての決定権を、概念上必然的につねに握っていないてはならない、という意味において「主権をもつ」単位なのである。(Schmitt 1932=1970:36)

政治的な友／敵の区別は、現実の敵と現実と戦うという危急の可能性を踏まえている。現実的で決定的な結束が友／敵の区別である。正負のネットワーク結合として組織化される社会的現実、友／敵の区別によって構成される政治的現実と重なり合う。現実的な世界として構成されるのは、正負の関係の配置にもとづく社会的=政治的現実である。

自己と他者の同一性と差異、あるいは集団的な同一性と差異は、社会的=政治的現実から汲み出される。人は、そこから汲み出した同一性と差異を意味として生きる。すなわち、それが我々の意味世界を構成する。

ソシオン理論では、ネットワーク的に構成された意味世界を「意味の閉球」(semios)

34) グロスマンの著書『死を生きながら』は、オスロ合意から10年の間に書いた小論をまとめたものである。この10年の間に、グロスマンの見解はしだいにサイドが主張してきたことと一致しつつあるように思える。両者の間に共有可能な感覚があることが、和平の可能性を示唆していると思いたい。

35) シュミットは、政治的なものの概念の基底には友／敵の区別があるという (Schmitt 1932=1970)。

として概念化する。セミオスは、一方の極に希望を、他方の極に恐怖を配置した意味の網の目として構成されたもので、恐怖の特異点からの離脱と希望の特異点への突破を目指して、人は意味世界のなかを運動する。

恐怖に対する負の荷重と希望に対する正の荷重はトリオン結合する。したがって、トリオン変換によって意味世界の内部では、恐怖からの離脱と希望への突破に向けて、高圧化した荷重の力動が働く。意味世界は、静的な秩序として構成されるのではなく、動的な秩序として絶えず運動への衝迫を産出し続けるのである。

シュミットが決定的な現実性と表現したように、意味世界での正負の荷重は抜き差しならない緊迫性をもって意識にあらわれる。意味の閉球が人間をとらえるのは、それが何より確実な現実として出現するからである。ロックしたトリオンの高圧化によって、決定的な現実性がつくり出される。

トリオン変換によって、ネットワークは意味の世界として閉じてしまう。閉じた世界の内部では、希望と恐怖の2極構造が感情論理として合理性を備えたものとして構成されている。したがって、セミオスの外側に立つ人から見ると非合理的に思えることも、閉じた意味世界の内部にいる人にとってはきわめて合理的で理に適った秩序と感じられる。

## II-9. 関係の振動

トリオンの不安定パタン (NPP、PNP、PPN、NNN) において、ソシオン内部に荷重の振動が発生する。複数の異なるチャンネルから、安定パタンに関して非整合的な情報が入力されたとき、状況に関する首尾一貫した整合的な説明が困難になる。

不安定パタンを構成する関係のうち、どこか1辺の荷重の正負を反転することで、安定パタンに移行することができる。不安定パタンにおいて、安定パタンへの移行を目指して主体が探索活動を行なう。このソシオンの探索活動が思考に対応する。

社会主義国家の粛清という事実から目をそらす、というような否認の機制は、安定パタンに投入されることによって不安定パタンを発生させる可能性のある情報をことごとく弾き返すことで、恒常的な安定を獲得する仕組みになっている。

F. ハイダーの均衡理論の仮説によると、人は事物や事象の諸関係を不安定パタンにおいて認識する状態に留まることは難しいようである。不安定パタンを安定パタンに変化させる力として、ハイダーは心理的圧力を想定している。ソシオン理論は、演算論理にもとづく予期出力を不安定から安定に向かわせる力として想定する。

不安定な状態では、心理的葛藤が高まる。あるいは、認識と予期がズレる。このような

内部状態は、主体にとって何らかの不快として経験されると考えると、不安定から安定への移行は理解しやすいように思える。

しかし、トリオンの安定／不安定を規定する荷重が現実感の生成機能を担うということは、トリオンの不安定状態がより複雑な問題であることを示唆しているのではないだろうか。見たくない現実から目をそらすとき、我々は、見たくない現実を見ることができない、という現実を構成してしまっているのではないか<sup>36)</sup>。

荷重の安定した備給が、現実の安定性を構築する。したがって、トリオンの不安定パターンにおける荷重の振動は、安定した現実の構築を妨げる危険がある。精神科医のR. D. レインによると、現実を確かな現実として実感できないとき、人は存在論的不安定 (ontological insecurity) の状態に陥る (Laing 1961=1975)。

存在論的不安定の状態において、人は自己がまとまりをもった存在であるという感覚をもつことができない。自己に関する非一貫性・断片性の感覚は、世界に対して彼／彼女が抱くまとまりがなくて断片的でつかみどころがないという感覚にちょうど対応している。まとまりがなくて、一貫していないと思えるような現実とは、ふつうの意識状態では想像するのが難しいかも知れない<sup>37)</sup>。詰まるところ、それは現実感の欠如した現実と考えられる。

不安定状態に留まって思考を続けることは、容易ではない。思考を続けるということは、存在論的不安定の深淵の傍らでどうにかバランスを取るような不安定な状態に身を置くことを意味する。

マンハイムのいう「浮動する知識人」というのは、社会的存在拘束性から気楽に抜け出せるという意味ではなく、いかなる状況においても存在論的に不安定な立場に身を置く他ない、という意味で理解すべきだろう。マンハイムは、次のようにいう。「この階層は中間に位置している。しかしそれは階級と階級との中間ではない。それは、いわば真空のなかでこれらの階級の上にふわふわ浮かんでいるようなものではない。まったく反対に、それは社会的空間のなかに生きて働いているあらゆる衝動を自分のうちに集約している」(Mannheim 1929=1971: 272)<sup>38)</sup>。

---

36) マンハイムによる部分的イデオロギーと全体的イデオロギーの区別も、ここでの問題にかかわっている。見たくない現実、見ることができない現実でもある。

37) 夢から覚めたときに、いま見たばかりの夢を思い出してそれが断片的で一貫しないイメージだったことに気付く。そういう感覚に近いかも知れない。ただし、その場合、我々は確かな現実のなかで覚醒しているという意識を持っている。

38) マンハイムは、足場のないところであらゆる思想的可能性にたくり寄せられる不安定な状況においてこそ、関係論的に思考する相関主義が可能になると考えていた。安全な固定した立場から「絶対的なもの」を主張するような思想に対して、マンハイムは次のように批判している。「現代の思想・存在状況のなかで、なんらかの『絶対的なもの』をもってると自称する輩が、いい気になってみずから高しとしているのを見るにつけ、なんと

多重媒介モデルは、存在論的不安定の深淵を含む意味論的なネットワークを記号化・図式化することで、現実を相対的に客体化し、分析的視点を確保するための道具としての役割を果たすことができる。

## II-10. 課題

最後に、多重媒介モデルの課題について述べておく。多重媒介モデルは、単なる理念的なモデルではなく、現実の社会現象を説明するための分析ツールを目指している。

現実の社会現象を説明するために多重媒介モデルを適用する場合、どのようにして荷重量を測定するかということが問題になる。荷重概念は、脳内に神経生理学的な対応物をもつと想定される予期のポテンシャル量として定義されている。対自的に認識可能な信頼や不信の量は質問紙や面接法によって、ある程度は測定可能である。

しかし、無意識のうちに抱かれている信頼／不信については、測定するのが困難と考えられる。とくに多重媒介モデルにおいて重要なメディアへの信頼／不信は、しばしば無意識の領域に沈んでいると考えられる。

また、不信や猜疑などの負の荷重については、抑圧や否認といった無意識の規制がかかるかも知れない。負の感情を投影することが道徳的に認められない対象に対して、それにもかかわらず負の荷重を備給するとき、そうした負の荷重動作は意識化された領域から排除される可能性が高い。無意識の荷重の測定と、負の荷重の測定は、多重媒介モデルの応用を考える上で、解決しなければならない課題である。

次に、説明すべき社会現象を構成するネットワークの範囲をどのように定義するかという問題がある。単純な社会現象の場合、多重媒介としてモデル化すべき変数は少ない（最も少ない場合は3項で足りる）。しかしながら、複雑な社会現象になると、影響を及ぼすと想定される変数は膨大な数になる場合もある。媒介の次数が高くなっていくと、ネットワーク結合の複雑性は一気に増大する。そうになると、現象をシンプルな図で表記することで複雑性を縮減するモデルの有用性が失われてしまうかもしれない。どこまで複雑な問題が扱えるか、という問題がある。

さらに、トリオン変換における不確実性という問題がある。トリオン変換で不安定パターンから安定パターンに移行する際に、以降の経路は複数ある。その場合、どの経路が選択さ

---

虫ずの走る思いを禁じえない。こういった絶対性を売り物にする自賛、自薦は、じつはほとんどの場合、現在の存在の段階であらわになってきた生の深淵を見まいとする、広般な層のこなかれ主義を当てこんでいるにすぎない」(Mannheim 1929=1971: 198-199)。

れるか、ということは一義的に決定できるのか。木村の仮説では、荷重入力の種類と向きが決定的に重要な役割を果たすという。

しかし、順序と向きを検証に関して、たとえば聞き取り調査によって対象から聞き出すことは難しい。記憶の不確かさという問題があるし、精神分析的投影の機制によって無意識の歪曲が働くかも知れない。多重媒介モデルの検証可能性を確保するためには、トリオン変換というモデルの核心となる原理を理論的により洗練させる必要がある。

以上の点に関して、理論を精密化していくことが多重媒介モデルの課題となる。

#### 【参考文献】

- Berger, Peter L. & Luckmann, T., 1966, *The Social Construction of Reality: A Treatise in the Sociology of Knowledge*, Doubleday & Company. (=1977, 山口節郎訳『日常世界の構成——アイデンティティと社会の弁証法』新曜社.)
- Carter, R., 1998, *Mapping the Mind*, Orion Publishing Group. (=1999, 藤井留美訳・養老孟司監修『脳と心の地形図——思考・感情・意識の深淵に向かって』原書房.)
- Coleman, J. S., 1990, *Foundations of Social Theory*, Harvard University Press.
- Courtois, S., et als., 1997, *Le livre noir du communisme: crimes, terreur, repression*, Paris: Robert Laffont. (=2001, 外川継男訳『共産主義黒書——くソ連篇』恵雅堂出版.)
- Damasio, A. R., 1994, *Descartes Error: Emotion, Reason, and the Human Brain*, New York: Grosset/Putnam. (=2000, 田中三彦訳『生存する脳——心と脳と身体と神秘』講談社.)
- Festinger, L., 1957, *A Theory of Cognitive Dissonance*, Row, Peterson. (=1965, 末永俊郎監訳『認知的不協和の理論——社会心理学序説』誠信書房.)
- Freud, S., 1921, *Massenpsychologie und Ich-Analyse* (=1970, 小此木啓吾訳「集団心理学と自我の分析」『フロイト著作集6 自我論・不安本能論』人文書院, 195-253.)
- Goffman, E., 1963, *Stigma: Notes on the Management of Spoiled Identity*, Prentice-Hall. (=1987, 石黒毅『スティグマの社会学』せりか書房.)
- Grossman, D., 2003, *Death as A Way of Life*, Farrar, Straus & Giroux. (=2004, 二木麻里訳『死を生きながら——イスラエル 1993-2003』みすず書房.)
- Heider, F., 1946, "Attitudes and Cognitive Organization", *The Journal of Psychology*, 21: 107-112.
- , 1958, *The Psychology of Interpersonal Relations*, Hillsdale, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates, Inc. (=1978, 大橋正夫訳『対人関係の心理学』誠信書房.)
- 日置弘一郎, 2001, 「複雑系としての社会システムとその制御」今田高俊・鈴木正仁・黒石晋編『複雑性を考える——自己組織性とはなにかII』ミネルヴァ書房, 189-216.)
- 笠原嘉, 1977, 『青年期』岩波書店.
- Katz, E. & Lazarsfeld, P. F., 1955, *Personal Influence*, Free Press. (=1965, 竹内郁郎訳『パーソナル・インフルエンス』培風館.)
- 木村敏, 1990, 『分裂病と他者』弘文堂.
- 木村洋二, 1983, 『笑いの社会学』世界思想社.

- , 1999, 「禁止と欠如と意味の誕生」 満田久義・青木康容編著『社会学への誘い』朝日新聞社.
- , 2001, 「ソシオンの一般理論 (Ⅲ) —— トリオンからソシオスへ」『関西大学社会学部紀要』32(2): 1-104.
- , 2002, 「ソシオンの一般理論 (Ⅳ) —— 愛と欲望のキューブ・モデルとソシオネットの力学系」『関西大学社会学部紀要』33(1): 1-44.
- 木村洋二・小林純子, 1999, 「〈資料〉無為庵・小林勝次郎の『損』」『関西大学社会学部紀要』30(3): 127-177.
- 木村洋二・松尾繁樹・渡邊太, 2001, 「イジメのモードとネットワークの力学——排除のソシオン理論をめぐって」『関西大学社会学部紀要』32(2), 177-204.
- 木村洋二・池信敬子, 2002, 「ソシオンのネットワークと鏡像のコミュニケーション(1)—密告・盗聴のモードをふくむ会話のマトリックス」『関西大学社会学部紀要』34(1): 45-97.
- 木村洋二・板村典英・池信敬子, 2004, 「『拉致』問題をめぐる4大新聞の荷重報道—多元メディアにおける『現実』の相互構築をめぐって」『関西大学社会学部紀要』35(3): 89-121.
- Koestler, A., 1968, *The Ghost in the Machine*, London: Hutchinson. (=1969, 日高敏隆・長野敬訳『機械の中の幽霊』ペリかん社.)
- Laing, R.D., 1961, *Self and Others*, London: Tavistock. (=1975, 志貴春彦・笠原嘉訳『自己と他者』みすず書房.)
- , 1960, *The Divided Self: An Existential Study in Sanity and Madness*, London: Tavistock. (=1971, 阪本健二・志貴春彦・笠原嘉訳『引き裂かれた自己』みすず書房.)
- Mannheim, K., 1929, *Ideologie und Utopia*. (=1971, 高橋徹・徳永恂訳「イデオロギーとユートピア」『世界の名著 56 マンハイム オルテガ』中央公論社, 93-381.)
- Mead, G. H., 1934, *Mind, Self, and Society: from the Standpoint of a Social Behaviorist*, The University of Chicago Press. (=1973, 稲葉三千男・滝沢正樹・中野収訳『精神・自我・社会』青木書店.)
- 森島恒雄, 1970, 『魔女狩り』岩波書店.
- Morin, E., 1981, *Pour sortir du XXe Siecle*, Fernand Nathan. (=1991, 秋枝茂夫訳『二十世紀からの脱出』法政大学出版局.)
- 小野武年・西条寿夫, 2001, 「情動と記憶のメカニズム」『失語症研究』21(2): 87-100.
- 大塚広之・阿比留烈・土門佑二「二つの離人症——記述現象学的立場からの再考」『精神神経学雑誌』103(5): 411-425.
- Popper, K., 1945, *The Open Society and Its Enemies*, London: Routledge. (=1980, 内田詔夫・小河原誠訳『開かれた社会とその敵(1)(2)』未来社.)
- Said, E., 2001, "Suicidal Ignorance", *Al-Ahram Weekly*, 560. (=2002, 中野真紀子・早尾貴紀訳「危険な無自覚」『戦争とプロパガンダ』みすず書房, 62-73.)
- Schmitt, C., 1932, *Der Begriff des Politischen*, München: Duncker & Humblot. (=1970, 田中浩・原田武雄訳『政治的なものの概念』未来社.)
- Simmel, G., 1908, *Soziologie*, Duncker & Humblot. (=1994 a, b, 居安正訳『社会学(上・下)』白水社.)
- Spencer, H., 1860, "The Physiology of Laughter", *The works of Herbert Spencer*, vol. XIV, 452-466.
- Sullivan, H. S., 1956, *Critical Studies in Psychiatry*, New York: W. W. Norton. (=1983, 中井久夫・山口直彦・松川周二訳『精神医学の臨床研究』みすず書房.)
- Sztompka, P., 1999, *Trust: A Sociological Theory*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Thibon, 1974, *L'ignorance toile*, Fayard. (=1976, 山崎庸一郎訳『星の輝きを宿した無知』みすず書房.)
- 上山安敏, 1998, 『魔女狩りとキリスト教』講談社.

- 渡邊大, 2000, 「カルト信者の救出——統一教会脱会者の『安住しえない境地』」『年報人間科学』21: 225-241.
- , 2002 a, 「ネットワークにおける負の関係の機能」『年報人間科学』23: 193-211.
- , 2002 b, 「洗脳、マインド・コントロールの神話」宗教社会学の会編『新世紀の宗教』創元社, 207-245.
- , 2003, 「ネットワークにおける感情論理の分析」大阪大学博士学位論文.
- Watanabe, F., 2004, "Socion Theory Applied to Religion: An Analysis of Triad Calculation in Social Networks", *Religion and Society: Special Issue Records of the 2002 Workshops*, 19-31.
- 安永浩, 1977, 『分裂病の論理学的精神病理』医学書院
- 米本和広, 2000, 『教祖逮捕』宝島社.
- Zizek, S., 1989, *The Sublime of Ideology*, Verso. (=2000, 鈴木晶訳『イデオロギーの崇高な対象』河出書房新社.)

—2004. 7. 10受稿—